伊曾保物語

津田文庫
文庫 1
1712

010190609273

伊曽保物語巻之一目録

第一　狐ト葡萄ノ話
第二　狐ト野羊ノ話
第三　狼ト鶴ノ話
第四　呆務ノ話
第五　蟻ト螽蟖ノ話
第六　鼠ノ仕業スル話
第七　鶏ト宝珠ノ話
第八　羔ト狼ノ話
第九　鷲ト狐ノ話
第十　鹿児ト鹿母ノ話
第十一　狐ト獅子ノ話
第十二　老タル犬ノ話
第十三　馬ト園丁ノ話
第十四　田舎漢ト蛇ノ話
第十五　蛙ト鼠ノ話
第十六　漁人笛ヲ吹ク話
第十七　樵人ト山靈ノ話
第十八　犬ト牛肉ノ話
第十九　狼ト羊児ノ話

第二十　蝿ト蜜壺ノ話
第二十一　軋ル車ノ話
第二十二　熊ト狐ノ話
第二十三　田舎鼠ト都鼠ノ話
第二十四　獅子ト鼠ノ話
第二十五　犬ト鷄ト狐ノ話
第二十六　蛙ト牛ノ話
第二十七　兎ト亀ノ話
第二十八　蟹児(カニノコ)ト蟹母ノ話
第二十九　寺ト迯込タ羊ノ話
第三十　牧童ト狼ノ話
第三十一　鷄(ニハトリ)ト猫ノ話
第三十二　狐ト山畜ノ話
第三十三　鴉(カラス)ト水瓶ノ話
第三十四　片眼(メッカチ)ノ鹿ノ話
第三十五　胃腑(イノフクロ)ト支躰ノ話
第三十六　旅人ト熊ノ話
第三十七　獅子ト驢馬ノ話
第三十八　牛部屋迯込タ鹿ノ話
第三十九　兎ト猟犬ノ話
第四十　海豚(イルカ)ト鰮(イワシ)魚ノ話
第四十一　焼炭人(スミヤキ)ト暴布人(サラシヤ)ノ話
第四十二　獅子ノ恋慕ノ話
第四十三　風ト日輪ノ話
第四十四　百姓ト児輩(ムスコ)ノ話
第四十五　樹ト斧ノ話

イソフ　巻之二目録

第四十六　驢馬ト猟狗ノ話
第四十七　狼ト羊ノ話
第四十八　獅子へ奉公スル狐ノ話
第四十九　歳徳神ト駱駝ノ話
第五十　驢馬トきりぎりスノ話
第五十一　閻拉現ト車引ノ話
第五十二　兎ト蛙ノ話
第五十三　農夫ト鶴ノ話
第五十四　漁師ト小魚ノ話
第六十五　橡ト蘆ノ話
第六十六　水星明神ト樵夫ノ話
第六十七　鶴ト雁ノ話
第六十八　獅子ト他獣ト猟ニ出ル話
第六十九　蚊ト牛ノ話
第七十　神仏天上ニ会合ノ話
第七十一　日輪妻迎ノ話
第七十二　盗人ト母ノ話
第七十三　猫ト鼠ノ話
第七十四　獅子王ト諸獣ノ話
第五十五　猿ト駱駝ノ話
第五十六　牝獅子ノ話
第五十七　蛙ノ求ノ話
第五十八　民夫ト獅子ノ話
第五十九　乳母ト狼ノ話
第六十　猿ト海豚ノ話
第六十一　犬ニ噬レタ狼ノ話
第六十二　燕ト鵞ノ話
第六十三　燈火ノ話
第六十四　牧人ト家牛ノ話
第七十五　一双ノ壺ノ話
第七十六　医者ト病人ノ話
第七十七　荒鼠高識ノ話
第七十八　獅子ト野羊ノ話
第七十九　鶩黄金ノ卵ヲ産話
第八十　チウワウニ招カレタ犬ノ話
第八十一　蛙ノ主人ヲ求ル話
第八十二　驢馬ト主人ノ話

伊蘇普 巻ノ三目録

第八十三 盗人ト飼犬ノ話
第八十四 告天子(ヒバリ)ト雛ノ話
第八十五 喇叭手虜(トリコ)ニ成話
第八十六 鳥ト獣ト戦話
第八十七 狼ハ羔ヲ捨ニダ牧羊話
第八十八 二人同伴斧(イタチ)ヲ拾ノ話
第八十九 蠅ト蟻ノ話
第九十 童児ト薊(アザミ)ノ話
第九十一 鷲ト鴉ノ話
第九十二 老人ト死神ノ話
第九十三 捕鳥奴(トリサシ)ト山鳥ノ話
第九十四 驢馬ヲ謀誘(ハカル)狐ノ話
第九十五 樅(モミ)ノ木ト覆盆子(キイチゴ)話
第九十六 狐ト野葡萄話
第九十七 守銭虜(カネタメオヤヂ)ノ話
第九十八 老寡婦(ゴケハアサン)ト雛婢(コヂヨチュウ)話
第九十九 獅子ト熊ト狐ノ話
第百 獅子ノ病氣(ビャウキ)ノ話
第百一 旅ヲシタ者ノ自慢話 右ノ下へ

左上つづき
第百二 狼ト馬ノ話
第百三 童児(コドモ)ト榛実(ヤマタリ)ノ話
第百四 狐ト假面(メン)ノ話
第百五 犠牛(ギギウ)ト耕牛(コウギウ)ノ話
第百六 獅子ト野牛話
第百七 野羊(ヤギ)ト牧奴(ヤギカイ)ノ話
第百八 佛像ヲ負(セヲフタ)驢ノ話
第百九 狐ト鶴ノ話
第百十 獅子ノ皮ヲ被(カフムツ)タ驢ノ話
第百十一 驢馬ノ陰ノ話
第百十二 野牛ト野羊ノ話
第百十三 蝦蟇(ヒキガヘル)ノ賣薬者話
第百十四 馬ト荷負(ニオフタ)驢ノ話
第百十五 男二人ノ妻ヲ持話
第百十六 鹽ヲ脊負(オフタ)驢ノ話
第百十七 谷川ニ立タ鹿ノ話
第百十八 天文者ノ話
第百十九 児輩(コドモ)ト蛙ノ話
第百二十 羊飼ト海ノ話
第百二十一 大魚ト小魚ノ話

第百廿二 牝野羊ト狼ノ話
第百廿三 河ト海ノ話
第百廿四 野猪ト狐ノ話
第百廿五 乗馬ト驢馬ノ話
第百廿六 豹ト狐ノ話
第百廿七 犬ト生皮ノ話
第百廿八 蟻ト蝿ノ話
第百廿九 狐ト猫ノ話
第百卅 銅師ト飼犬ノ話
第百卅一 田舎人ト犬ノ話
第百卅二 狩人ト伐木人ノ話
第百卅三 老爺ト息子トロバノ話

目録終

伊蘇保物語巻之一

第一 狐と葡萄ノ話

早稲田大学図書

つだ文庫

或日狐葡萄園ニ入リ未ク熟セシ葡萄ノ高キ架ヨリ披(ズ)ナリニサガリタルヲ見テ是ハ甘サウジヤト皷(シタウチ)ヲナシテ賞揚幾度トナク躍リ揚リタレモトヾカズ、ソコデ狐ガ怒ヲ發テヨレナンダコンナ物ヲ葡萄ハスツパイワ

ナニデモ手前ガツテノ物ジヤ自分ノ思フ様ニナレバ賞メ、ナラ子バソシルガ情ノ私ニスル所ジヤエヘ常ニイマシメ子バナラヌ ㊗

第二　狐ト野羊ノ話

或狐溜井ニ落チテ上ランコトスルニ手ガヽリナケレバイカニセンコト思案スル中ニ野羊水ヲ飲マンコト其處ヘキタリ狐ガ首ヲ出シタルヲ見テ野羊「狐公（ミサン）水ハヨーゴザリマスカ、沢山アリマスカト問ヘバ狐マコトノ事ヲ押シ穏シ「イヤモー好水デアリマス、サアコヽエ下リナサイ中々大ソーアツテ私ニハ飲ミ尽セマセント云フ故野羊何ノ遠慮モナク直ニ飛ビ込ムソースルト狐ガスカサズ角ヘ手ヲカケ首ヲフマヘテ躍上リ心よーしそ野羊をフリ顧テアザケリ笑ヒ「モシ汝ガ髭ノ半分ヘモ智慧ヲ持テ居タナラ飛下ル前ニ能見タローニ

第三　狼ト鶴ノ話

或狼ノドニ大イナル骨ヲ立テアチコチ狂ヒ歩キ我是苦痛ヲ救フ者アラバ好キ報ヲナサント叫ブ鶴其苦ヲ見テ気ノ毒ニ思ヒ一ツニハ好キ者ヲ送ラント云ハルヽニ心動キ我レ救ヒヤカント長キ嘴ヲ狼ノ口中ニカシ入レ骨ヲ引ヌキサラバ褒美ヲ給ワレトテー子ーニ乞ヒ求メタレバ狼目ヲ怒ラセ牙ヲムキダシ「ナニコノ恩知ラズメ汝ハ今我口ヘ首ヲ入レタジャ子ーカソレヲ食切ラヌハ最僥倖ダ何デ褒美ガイルモノカヲレノ太ヘノタペラポーメトノヽシリ答ヘケルトナン

報ヲ得タイノ礼ヲモライタイノト思テ人ヲ救フモノハ偶ゝ悪
人デも救ヒ當テ礼所デハナク却テ悪ロセラレタトテ仕方ガナイ
何でも人ヲ救タリ人ニホドコシタリスル者ガ報ヲ目的ニスル者ハ
了簡違ヒヂヤ

第四呆烏（アホーガラス）ノ話

元ノ群ヘ立カエリ再ビ仲間ヘ入ラントスルニ友鳥ドモ承知セズ
先キニキヤツノ譲リタル顔色ガ悪シヒト言テ中ヽ仲間入ラバ
サセズ時ニ古老ノ烏ガ親切ニ意見シテ是レ汝天造様ガ
サヅケサッシヤッタ分際ヲ守テノタナラ何ト長上ノ者ニシカラレモ

せまい同輩の者にも窘められもせまいに

第五 蟻（あり）と螽蟖（きりぎりす）ノ話

夏も過ぎ秋もたけ稍冬枯（ふゆがれ）の頃になりてあまり暖なる日蟻ども多く打集り
夏の日に貯めたる食を日に曝さんとて穴より引出し並べたりしが之れ處へいと飢
労（つか）れたるきりぎりすよろよろひきて食をつかぬる。いささか其食を分ちたまはれと
乞へり。この時古老の蟻ふりかへりていふさま汝ハきりぎりすよな汝ハ夏中何
をして暮されしや何故食に困らるるやと問へハきりぎりす答て。此夏ハ
木陰に羽衣謡ひつ舞も
力ハ無用なり我等ハ夏の労も
喜ふ急ぎるしたり然に今日の安心

花ニ戯レ葉ニ眠リ
云モキラヌニ蟻打笑ヒさらハ
天ニ脊ヲサラスト餌ヲ遂ビ此冬ゝ枯用
永ノ夜中ニ舞ウタヒテ口志ラズト答ケル

報ヲ得タイノ礼ヲモライタイノト思テ人ヲ救フモノハ偶ゝ悪
人でも救ヒ當テ礼所デハナク却テ悪ロセラレタトテ仕ニカガナイ
何でも人ヲ救タリ人ニホドコレタリスル者ガ報ヲ目的ニスル者ハ
大間違ヰゾヤ

第四呆鳥(アホーガラス)ノ話

或呆鳥ノイカニモレテ身ヲカザリ仲間鳥ニ誇ランモノヲト潛カニ孔
雀ノ抜羽子ヲ拾ヒ己ガ毛羽ノ間ニ挿コミ今迄ノ朋輩ヲ軽
侮シテ美シキ孔雀ノ群ヘ飛入ルト孔雀ハ直ニコノマギレ者ヲ
見出シ悪キ奴カナト其借羽ヲハギ取リ汝ハ汝ノコトヲシレナセイト
嘴ヲソロヘテ追ヒ出シタリソコデ呆鳥ハ外ニ行クベキ方モナケレバ

せまき同牢(ろうま)の者にも嫌られもせまいに

第五 蟻(あり)と蟋蟀(きりぎりす)ノ話

夏も過ぎ秋もたけ稍冬枯(ふゆがれ)の頃になりてあたゝかなる日蟻たち多く打集(あつま)り
夏の日に貯めたる糧を日に曝(さら)さんとて穴より引出し居たりけるに所へいと飢(うゑ)
労(つか)れたるきりぎりすよろよろひきて余をつらぬる。いざ少しの糧を分ちたまはれと
乞(こひ)りて此言の蟻どもの[illegible]ていふさまは汝はきりぎりすよる汝は夏中何
をして暮されしや何故食に困(こま)られるやと問へばきりぎりす蹲踞(とどう)して昔夏は
いと面白き事ありし故ニ戯(たはむ)れ遊び眠りにはいとおかしき羽衣(うすぎぬ)謡ひつ[illegible]も
[illegible]つと云もきかぬ[illegible]やひき[illegible]合力(ごうりき)ハいた無用(むよう)なり我等は夏の[illegible]
天に脊(せ)[illegible]を[illegible]枯の用意をなしたり故に今日の安心

ありて[illegible]欺ひて徒に日を消りし者ハ今に至て不似べき
若あり我ハ咏[illegible]へ[illegible]るとぞ

夏に穢[illegible]徒ハ今に至て顕ハる物やぞ

第六 萬の仕業なる話

昔日或山烈しく震動して凶より何か出現すると云ふ評判が高く之遠近より見物人多く集り来て是ハ定めて珍らしき物の出る成べし何なるらんと人々待かねたりし小頭曳衣て大に叱ひびきすると一丈の小蟲が孤然踊出して ヘヘナウ

此話ハ廣大の額工を云ひしなれど細小な仕事をなす者をそしりあるのだや

第七 鷄と宝珠ノ話

或日雄鷄が雌鷄の為に餌を喙ふとて不と藁の中から宝珠を見出し ヨンドリ ヲヤ是ハ結構る玉だや好む人ハ嬉しがるだろうなれし私ハ世界中の玉珠より一粒でも麦の方が好 ○

此鷄ハ能解理せし物じや世の中には善悪の分ちもつかずに何が宝かもしらずして徒らに肴過る愚人が多い。

第八 鳶ト狼ノ話

[illegible]下し嶺り小悪口すると猛立止り睨る廉小するる何も汝か語かのじや子

△卑怯者ノ己レ云フ
◇居所ガイイカラノ事ゲ
㊉高位ニ居テ人ヲアナドル ハ
アダカモ 鳶ノ狼ヲ、

ありし[illegible]舞歌ひに徒らに日を消りし者ハ冬に至りて飢べき
若なり我ハ咲[illegible]おきへけるとぞ
夏に稼ぎし[illegible]ハ冬に至て顕はる物じやぞ

第六 蟻の仕業なる話

昔日或山烈しく震動して内より何か出現すると云ふ評判が高く之
を遠近より見物人多く集り来て是ハ定めて珍らしき物の出るなる
べし何ならんと人々待かねたりし頃に須臾有て大きに地ひびきすると一
丈の小蟻が孤然踊出して[illegible]
此話しハ広大の細工を云ふかしらず細小な仕事をする
者をそしりあるのだや

第七 鶏と宝珠ノ話

或日雄鶏が雌鶏の為に餌を啄ふとて不と藁の中から宝珠を
見出しヲンドリ「ヲや是ハ結構な玉だや好む人ハ悦ばしがるだろうなれども
私ハ世界中の宝珠より一粒でも麦の方が好○
此鶏ハ能く解理せし物じや世の中には善悪の見わけもつかずに
何が宝か知らずして徒らに肴過る愚人が多い。

第八 鷲と狼ノ話

鷲屋の上より下を通る狼を見下し頻りに悪口すると狼立止り眼
あげて「オイ此卑怯[illegible]名とする[illegible]何も汝か強いのじやな
へ[illegible]口[illegible]所[illegible]の[illegible]

偽ニ居て人とあるどもハ恰も鸚の猪を罵るに一とすが

第九 鷲卜狐ノ話

或大木の梢ニ雌鷲巣を作り狐ハ其下ニ穴を造り互ひに厚情に
交際居たるが一日母狐他行せしまに鷲悪心を起て我栖へ帰る
ミるれバ彼より欺漢ハるしけれど児狐をつかひ我児の餌食に為
返り於て母狐帰りきて隣交に有まじきことゝ怒り奪られし児を
返されんことを乞しに鷲少しも承知せず依て狐ハ怒を堪えかね
神社の燈火をとり来て樹下より火を放ち己が児狐と共に鷲の
雛を焼亡ぼし忽ち仇を返しけることぞ

暴君一時勢に乗じて残虐を民に加ふるともいかんぞ其復讐をまぬかるべきや

第十 鹿児卜鹿母ノ話

或日鹿児鹿母に向ひ「母さま汝ハ犬より大く疾くもありその上また
の角もさへ持なひに何故犬を恐れ給ふや」母答へて「汝のいふところ
じや私もそう思つて居ますけれど私の耳へ犬の吠声が入りますと
おのづから恐くなり我足がむやみに私をつれて逃てしまひます

此様臆病ものにハ勇気を附る方図がない

第十一 狐卜獅子ノ話

未だ獅子を見ざりし一の狐が初て途中で獅子と行逢たる時殆と
恐死せんとせりき後又遭逢たる時少し恐たるさまを隠さんとせるも
生ド三度目より後に又出遭たる時今度ハ接近る「イヤ大王どちらで

ござりますと云ようになれくしくぬたりと戒む

狎昵ハ怨仇を生ず

第十二 老タル犬ノ話

昔日ハ勢ひも盛にして功を顕したる猟犬が歳年頃に衰て便も役に立
ぬやうになりし故或日主に従て猪を逐出し其身ハ喰付たるに牙志
まふぞして猪程去る其時主人追来り獲を逃せし罪を罵りむちを
揚て打んとしければ犬「年の寄る私を助けて下さりませ何も猪手で逃
しさのではムりませぬ全く力が衰へてござりまする今日のあやまち
をおしかりなくとふぞ昔の功労をおもつて下さりませ

人も衰へぬ昔勢ひ盛にして戦場に功を顕せしもついに焦悴ハ役に立ずぬ故之主として昔の功をおもハず
只むごく罰ふものハ此猟人に異るなぞ

第十三 蜂と園丈ノ話

或蜂丈飼ふの豆蜂を窃んで己が所得となし主人ハ怪しまれど
来ぬ夏中能働いて居るの蹄蜜を勢洛ひるとし戻して君ぜんと
背れ厭されバ汝そんなに私を能君せ払とおもひぬるなら手流洗
を大ていにして食物を充分下さいませ

是ハ本をすてゝ末をつとむる者を譏りるたとへとぬべし

第十四 田舎漢ト蛇ノ話

冬ノ夕昔ニ或農夫畑ヨリ帰リタル途中デ垣ノモトニ凍死ナントスル小

蛇ヲ見テ憐ナリト覚エケレバ懐中ニテ我家エ帰リ地爐ノ側ニサシ置
ケルニサンジノ内ニ蛇甦リ卒タニシテ首ヲアゲシガ爐ノマハリニアソビイタ
リシ童子ヲ見テ舌ヲ吐キ追カケ廻ワリケレバ老農大ニイカ
リテアリテアノ斧ヲヨウトウテ忽チ首ヲキリヒシギケルト

人モフタツノ如クモシ恩ヲ交テ悪ト成ハスカヘツテ悪ミ[illegible]ヲナ
スモノハ人ノイカリヲ免レズト

第十五　蛙ト蛇ノ話

昔或所ニ蛙と蛇と心安く暮せしが今迄の地ハ住悪しとて他
所へ移ることを約し相伴て出立せり途中ニ蛙ハ親切ニして
朋友の為を踏違ぬようにと蛇の前足を己が後足へ結びつけ束ね
おして施羽しが忽ち小川の涯ニ出より其時蛙ハ蛇を一処しいざ渡
らんと水ニ飛込たに河中まで泳ぎ卯しが蛙忽ち本心を顕し蛇
を水中へ引入んと急ぎ水底へもぐり入る然るに蛇ハ引込れじと水
面ニありて騒動せりけるニ一羽の鷹岸上の樹ニ止りゐるが是を見
るより好餌食ぞと舞下りて中流ニ騒ぐ蛇をつかんで只一ト呑のしま施
あられバ蛙もたちまち空ニ吊されて同じ禍ひニかゝりけるとぞ
勘弁なく朋友とおちいる果ハ禍ひまぬのがるべし又隣人
を傷ふさんとたくめバ自己モ又禍ひニかゝるものなりけん

第十六　漁人笛を吹話

或笛自慢の漁人漁ニ出海の面ニ魚の多く群たるを見て吾もし

こゝにて面白く笛を吹ば魚共も調子に乗て浜へ踊り上るなるべし
これ網を投より上策なりと例の笛を吹出せしが魚は一向感ぜざり
けんそこで漁人は立上り飛まじや行ぬと笛を垂網を取て投入
たれば数多の魚鰷一網にかゝり汐の上へあげられさりとて漁人
魚のをどりさはぐを見て笑ひながら「チヨツ」吾が笛を吹た時汝等が
踊らぬ故に汝等が今踊さとて吾は少しもかまやしねへぞ
時と所とに依てなすを策の最も上なる物とす何ぞ笛を吹
いて魚をとるのを得べき

第十七樵夫下山霊ノ話

武山の麓に住る樵人山の斧とこん言ふなり一夕栖家へ尋行しに
折しも極寒にて冷く有ければきこり指を口へ当て吹と主人怪しこそれは
何を致るのだやと言きこり指先が余り冻へて覚へるゆゑ温めるのでござりますと答やがて食物を出せしに熱くして食難ければきこりさふを
口へ当て吹と主人又何をするのだやと問きこり羹が余り熱き由ゑ
冷ますのでござりますと答主人忽ち面色を変吾は以後汝と交
通まじきぞ同じ口より熱くも冷くも吹なりては息き出る人とは
何事もなしがたきぞと云ける
是は人と交るに云毎に変り信なき者は頼みに友を失ふと云たとへ

第十八犬と牛肉の話

犬牛舗より肉一塊盗出し引くはへたるまゝ溝を渡るとて橋の中ほどに

通りたる時其影の水へ写れるを見て他の犬己の方へ来るより大き成肉をくはへ来るよと心得夫をも又吾物にせんものをと水に写れる肉をくらひ付しに今まで己がくはへし肉水底に沈ミ終に流し物をさへ一時にあらせ失ひけるとぞ

諺に影を掴むで実を失ふと云ことあり凡世の中の人ゝハ浮雲たる富を慕ひてハ固有せる真の宝を失ふ浅ましき事なからむや

第十九 狼ト羊児の話

或狼流河の上流に徘徊し遥下流に羊児の遊び居るのを伺ひいかにもして其身に入んものをと先己が辞をこしらへて羊の方へかけ来り狼ハ「此愚羊汝ハ我飲で居る水を濁さやがるな」といへバ羊丁寧に答て「私ハ下流で飲で居ましたのですからたとへ濁しましても上流までハ決と害ハ成りませぬ」狼ハ「夫ハそふぢやとて汝ハ一年前に吾を悪く云たる羊なるぞ」「否それハ一年前にハ私ハまだ生れませぬ」狼ハ「たとへ汝でないとて汝が父母がそふいふたにちがひなし汝が云ずとも同然ぢや夫が己様の頓着をのがれぬことにするものか」ト云まゝに弱羊にかぶりつきずたずたに引さきて食ひけるとぞ

暴人に向て分解ハ通り難し たとへ吾が正理の人なりとも悪人の威勢さかんなる時にハこれに抗る能はずト志るべし

第二十 蠅ト蜜壺ノ話

或砂糖類を商ふ店にて蜂蜜の壺倒れ蜜こぼれ出たれバ数多の蠅群り来て一滴も残すまじと是を貪り居たり然るに小時ありて何れも足ことごとく蜜にからまりて飛んとするに飛べずそこで蠅が嘆そくして「アヽ我輩ハ実に愚だつた只一時の歓楽の為に大切の命を失ひますと口々に悔合ひけるとぞ

第二十一 軋車ノ話

牛に荷車を引せて悪き所をとをりたる車の軋る事甚し牛飼大に叱て此畜生なぜ汝ハ左様に鳴りやアノ重荷を引ている牛ハ黙て居たのに

大声で鳴るのがいつも一番苦しいのだといふわけでもない

第二十二 熊ト狐ノ話

或時熊が狐に向ひ熊ハ人間を敬ふと云説を主張して「我輩ハ人が死で居る時ハ之をよけて害を致しませぬト云ハ狐笑ひながら「ヱヽ汝等が平日生て居る人を食なければ吾も汝の説を信実だと云ふのさ

人を死後に敬ふんより人を死より免れしむべし

第二十三 田舎鼠ト都鼠の話

或時田舎鼠都鼠の友鼠を招きしことありしが本より田舎のことなれバ諸事万事倹約に好物とてハ云れた菓子類のみなれバ米麦酪糟何れとても有合せてもてなせしに都鼠ハ口にあハねバ只彼是と食乱し主の鼠が麦を穂のまゝ甘そふにくぢるのを見て「ナント汝ハマアよく

こんな生産を愚慢るさへおかまゐで穴に居る蟇同然だどふしてこんな淋
しい岩や樹斗ある僻地が華やか人が盛に往来する繁華の町のごとく
おもしろきものか実に汝は面白くも無ク月日を送りぞ吾は何でも生で居
内は強盛る生産を志るゝればならぬ何と嵐が百万年生かれる物で
も有まいぞふじや有ませぬかサア吾と一所に来るさい吾がくらしも都の
様子もお目にかけさいト云バ是の嵐は急に都の景状がみたくなり
さらバ御同伴に参りませふト打連立て出立せり斯て田舎嵐ハ都嵐
と共もつれて或日黄昏に紛まつ城中に忍入り漸く都に到着し
きたとある大家に至りたり是ぞ都嵐の住家にて安しに揃ろ結構
なりやがて奥へ入りいと奥深き所に至れば綾の衾襖の旅金銀

珠玉象牙の彫工所様まで飾てあり扨一方を見渡れバ酒宴有たる
跡と見えて山海の珍味を並散し器物の数志れず都の有名割烹
店を已に白兎多と云者揃ぞ有都嵐ハ田舎嵐を上座に居自
東西奔走して皿に皿を添其味ニ美味を重ねるて丁寧にもて
なせバ田舎嵐ハ満足していかさま吾も此所ニ住業曜栄花を受居
ものぞ生て居る内此る逢に逢しハ此上なき幸福なり今迄の吾いな
か住居ハいと愚なりきと云ひつゝ容も身も打とけて語り楽しむ其
最中部屋の戸がらりト押開き一疋の醉客突入しバ嵐共ハ仰天し
座より下へ転び落頭損るを大方ならず命一つからぐ逃漸くすミ
かへかくれけるが稍暫らくして人も去り風波再び志づまりければいる嵐ハ

よろく送出し都鼠に別をつげ鼠こんなことを好人ハ好ざらうが
吾ハ恐しいことゝ気を落すの者にで甘いものを食ふよりいつそ落
付き安心の事で麦飯を食方が余程好ござりますとそこくに云
すて己が住家に帰りけるとぞ

第二十四 獅子ト鼠ノ話

或日獅子王洞に在て仮寝なる時鼠あちこち駈歩行柏子に不図
獅子王の鼻へかけ上り午睡を覚を驚かしければ獅子王直に手
をさし延し不意来る鼠を押へ一潰しにせんとせし処鼠哀を成声を
あげ「つい致しましたので御座りますどふぞ助けて下さりませ私の様な小身の
奴に大いなる手をお汚しなされましては御作るに及ばし候といへぞ

獅子王鼠の恐れたる様見て笑ひながら許しけり後程なく獅子王
獣を猟て走り廻るとき猟夫の設る罠にかかり逃れんとするに逃れ
られずそこで大きなる声をあげて吼狂ひいると以前助けられる鼠が
なるに聞つけあれハ何でも恩を受し獣に違ひないと走て其所へ
かけて来り獅子にかゞまりたる縄を噛切り無難すくひ出しけるとぞ
人へ親切をするにかけつして無益なと成ぬどの様な者でも恩
を受て恩をむくふ事の出来ぬといふ様な者ハないぞ

第二十五 犬ト鷄ト狐ノ話

犬と鷄と懇意にて旅行にある所へ出かけたりしに帰路並木に至りける
時日暮ければさらバ此所にて一泊致さんと鷄ハ樹の枝へ栖り犬ハ去げて

吹けりさて暁且に成と鶏ハ早く起例の経誦経を始め東天江と
唱ひ出せしと三毛の猫が忽ち聞つけ好頃合だとうけ来り樹の上
にとまり居る鶏にむかひ「イヤ汝ハこの世好鶏じや何でも禽鳥の中でハ
一番役にお立なさるてにお姿も又妙じやそこでへおかりるさん法一本に
経のお勤めを致しませふト云バ鶏ハ其意をさとり「夫ハ有難う存ります
ます彼所に同行の鐘お坊が居ますから一寸呼でくださりませ誦経
に鐘の世のハどうも調子が悪いものでござりますト云故猫が「夫じやア
呼で来りませふト出かけると調度犬が走できて忽ち是を喰殺ける
人を罠にかけ採とすると却て己が罠にかかるものじや

第二十六 蛙ト牛ノ話

或日牛沢辺に出て草を食ミあちこち歩行けるが蛙児の一群まで
居のを見らず踏潰しまた内の一疋が危き場を逃れ母蛙の許へ注進を
して「ヤア阿母さん夫ハモウ何とも有大な獣だが其が同気を踏潰しまし
たといへバ母蛙驚いて「ヤア大きかろさか夫ハどんなに大かろさト云ながら
自分が腹をふくらしあかり「こんなに大かろさかト云へバ小蛙「それよりや大かりま
せんよつと大うござりましよ「ヨシ それハこんなに大かろさかト云ながらグット
ふくれあかると児蛙が仰向て見て「イヤアお母さん中々其分にも及びま
せぬと云故母蛙「夫じや是程かと勢一ぱい息張と腹がやぶれて死けるとぞ
己が及びもせぬ巨大なる事を仕組とすると多くハ自滅する物じや

第二十七 兎ト亀ノ話

兎ハ亀の歩行の遅きを笑ひむかふにして「コウこゝへ来やかけつこをしよう
乃公の足ハ何で出来てると思ふぞと威張バ亀ハ迷惑にハ思へども一ツ所へ
おし並び走レト云れて寸分も猶豫せず例の通り遅くと歩行出
すされど兎ハ固亀を侮つて斯事なれバ一向にせきもせず「吾ハマア一
睡りして往ても急いで走るせへ直に追越ト云てとろりとするうちに
亀の奴ハ見るくぬく殺兎根を消し急に躍出して約束のところへ
到て見れバ兎ハ先刻に着して欠伸をして居たりけると
遅緩なりとも弛されバ急にして怠る者に勝ツ

第二十八 蟹児ト母蟹ノ話

母蟹児蟹に向ひ「なぜ其子ハそんなに横斜あるき振をするぞト
いへバ子ハ「阿母さん歩行振をお見せなさい私ハあなたの
真似を歩行ますからそれを見て見ならひませう
指図せんより先手本を見せよ己正しからざれバ人を正し
うする事能ハずと云ぞや

第二十九 寺へ逃込ダ羊ノ話

羊狼に追駈られ寺の内へ逃込と狼せんかたなく外から声をかけ「コウ汝ハ
坊主につかまると殺されるぞ 羊「そふならうたゞ汝に食れるより神さまの
牲になる方がましぞ
羊といへどもよく死所を志れり

第三十 牧童ト狼ノ話

村在の野に畜付る羊の番をする牧童毎日見張居る計りでさえ退屈して一日ふと狼が来たと喚あるきしと村中の者が皆四方より駈来り空に大騒動したるを見て至極面白き事に思ひ夫より後ハ二ど三度も同じ騒を仕出して人を詫びける然るに或日まことに狼出来りたれバ牧童大きに仰天して大声揚て駈まハり一生けんめいに加勢を喚ハど村の者ハ耳にもかけず又例の戯謔ごとと一向に出合ねバ数多の羊一疋も残らず皆狼に喰れるとぞ

平生虚言をつく者ハ緊要の時に実事を云ても決して信ぜられぬものぞ児童よ虚言をつくまいぞ

第三十一 鶏ト猫ノ話

或鶏病で床につくと猫親切に見舞にきて枕頭へ摺寄「足下があんずいハいかゞでござりますか何ぞ御用が有るなら致しませふ何ぞ入用の物でも有升なりとも世話に有ますなら私が持て来りませふ御遠慮なく左ふ仰しやつて「イヤサ変して御騒ぎなさるな夫て御出なさい」ト云バ二ハトリ「有難ふ御座ります私なんども足下の御世話下さらねのが一ばんよふござり升

来て呉ひ度もない客人ハ別辞の時にイヤよくお帰んなされといふきげんじや

第三十二 狐ト山番ノ話

狐猟人に追駈られ山番の小屋の在所へ逃て来て番人の本を頼テ居ル

のがるゝそ旦那ちよつくり隠れさせて下されトいへバ當人がそこへ下ル大のこがら
あふ座をとへ之を被瓶にて急をさとり喜んで内へ飛込片隅に隠まつて
居ると軈て来る所へ豪き相公二三人追来りヤイ山家猟がきやアしねへか
トいへバ當人が香と云る者が陽の方へチヨイと指をさすなど相公を
一向悟らず「夫ドやアもつと先ざ」ト又籔を掲て遁出すそこで猟人
の家から見へるく獺と猟がやレ嬉しやと跳走して往を當人見付てヤイ
畜生め助て貰つて礼も云ずに往奴があるものかと云ハ猟ゐりかへり「有
難い旦那さんどうやてモシ貴君の指が此の指に猟切るかどふして挨拶
をせずに往きませう

どのようふまに上がよくとも為るすが悪ければやはり不好

第三十三 鴉ト水瓶ノ話

或鴉渇に堪兼たる時ふと向ふに水瓶の有を見付喜んで其所へ飛
おりて見るに水低くして嘴とゞかずされバとて瓶を破んにも覆さんにも
力に及ばずいかにもせんと當惑して居たりしがふと心ひ付て傍らに有砂利を
嘴へ一ツヅヽ瓶の内へ落せしに水量が段々増てきて終に縁まで上り
し故是を飲で死を免れたりしと

まゝや力が及ばぬといふ所で工夫と思案とが功を奏するその
こそ窮迫トいふすがいつも發明の根で御座る

第三十四 片眼ノ鹿ノ話

一日片眼の鹿海辺に出て草を食ふに其盲たる眼を海の方にし明る眼

去陸の方にし是でハたとへ狼人が来ても直に一目瞭然だと安心して住
んで居ると武士が三人船板に出かけあちこち潜き出し海岸に麻の
居のを見付旨合ふうに矢を箭へ忽ち首を射にけり其時鹿行臭
ついそ云けるハ「あゝ君ほど運の悪ひ者ハないぞ何でも危殆だと思つ
方ハ安泰で大丈夫だと見込だ方から敵がござる

何でも心ぎこひハ思ひもよらぬ方から来るものじや

第三十五 胃腑ト手足ノ話

或時人の四肢五官胃腑に向て一揆を起し各申し合けるハ我々を
耕居ねとなく働て頻りに食物を仕送るに彼ハ座して食ふのみに
てとんと我等に報ひんともせず不給所詮今日より働を止め無念
喜うものゝ仕送りをせざるに如ずと足ハ食堂へ行ことを止め手ハ食物を
口へ持込ことをやめ口ハ是を受取ことを止め歯ハ是を噛むことを止め鼻ハ是
をかぐことを止め目ハ是を見ることを止め耳ハ飯時拍子木を聞ことを嫌ひ斯
のごとくにして早三日たつと胃腑全く飢渇て手足ハ痩り目ハ眩み全
体の衰弱きハまり有りし時胃腑一揆が手に向ひ云けるハ「ナント汝
たちハ写前る気じや是で今分りましたらう今迄君がたへ仕送て
食物をバ何も君が自分の用に計り喜ハしませぬいつも是を消化て
汁にこなして血の製造場へ送りましたが其血が汝等を今まで養ふ
た血になつたのじや汝等が君を苦しむ手に労たとお云ひいるが君も
また汝等の食物拵へに斗り胴を費したと云ますアヽ云つくにす

るとそんなものだから何と皆の気が合て以来中よく働きませうといふ
せぬとおさゞびの為になりませぬ

第三十六 旅人ト熊ノ話

朋友二人連立て旅行せしが山路にて熊に出合たり一人ハ遠くより来る熊を目早く見付て胆を消し同伴にハとんと構ひもせずに怪我ないに樹の上へ駈上る然るに後の一人ハ些と遅く見付た故既にあげる間合もなく又手に何も持ぬ故防ぐこともできずそこで熊ハ死人に構ぬものと兼て聞ていた説を思ひ出して死だ真似をして地に倒れて居ると熊ハやがて来て面を付きて耳や鼻や胸の辺をあちこち嗅廻りしきりに気息を伺ひたれど絶て生て居る様子ハ無ければこれハ倒れ行倒じやと独言をして熊ハ立去ると樹の上のかげに友人がする〳〵と降来て友人に向ひ「今熊が汝に何か耳語りしと振たが何と云ましたといへバ倒れ居た友人がおかしさをこらへて「イヤさしたる内談でもござらぬ〳〵の熊のおしへてさに何でも危急な時に身為手りして友人を見捨る者と交際なかれよとこそのさ

第三十七 獅子ト驢馬ト狐ノ話

獅子驢馬狐供に三人合せて猟に出て獲りし小さものの甚沢山な獅子ろバに命じて是を分たしむろバ其肉を三分にし獅子と狐の前へ差出「サア各々随意に取給へ」と云ハ獅子甚だふきげんにて一言にも及ばずろバを引さきたりそこで獅子又狐を呼び肉を分てと云付ると狐委細承知

てい弟の肉を一摑にして肉より己の分ト云て只らずの肉を取のけ狐を
不法獅子の弟へ差出すと獅子王忽ち氣色が変り誰がこんなたぐ
しい分方を汝に教へた「へヱ」私ハあぞの落命から知りました
自ら不幸に逢て悟らんより他の不幸を以ていましめとせよ

第三十八 牛部屋へ逃込だ鹿の話

猟人に追れて逃延たる鹿或百性家を見かけると駈込で恰好に有
牛部屋へ飛込行隅に積で有る藁の中へ隠れるとつながれて居る牛が
かけ汝ハ何でこんな人目の多い所へ逃込だ「いや」か黙て居てくんなせへい
ま余を見ると直に他所へ往からト云てかれこれする内落着になると
牛奴が夕飯を持ふきて作男が急しそうに幾度も出入をする者がきんが
見廻りにきてあちこちと蹌来て頭を出さずに隠れていた鹿ハ班もきが付
ずに仕舞ふト鹿ハ方図を海で安心のぞあいに然さと出この中から顔を
あげ牛にあつく礼をのべてすくくと起かけると牛が低い声で「アモシ
ッド待るせへ我等ハどうぞ無難に逃すせる様にと祈て居るのでござりまする
に百人弟の眼珠を持てる人が有ますのもし夫がきちやア汝の命が危い
のぞ上話して居る所へ亭家の主人晩飯を食畢次の振子を一見り見
てこようわざく世話ハ牛の振子が悪い振さと先牛べやへずつと這入りて
あいあけをつんて大る声をあげ「なぜこんなに秣を少くする」ヘ己を見た
んと為ゐへ丑祖がつぶれてア大付さ蜘の巣が掛へ「ヱナこれぞりのこに
いるまでかゝるのだト小云を云るがゝ来ゆ見廻してこちらの中から角尖

がちよろつと出て来るのを見付「ヤア〳〵盗人が来た〳〵」と叫ぶと若者があまた
勢揃へ付てきて忽ち手捕にしてけり「何でも盗人稼同の如く者は命

第三十九 兎ト猟犬ノ話

猟犬叢薄中から兎を駆出して遠くまで追かけしに兎逞強して
逃げのびたり時に途中で往合せる野羊飼が犬の失態を嘲て
笑ひけるが二足の方じやア中々兎の方が疾足じやといふ犬が答て
汝独りに食の為に走るけるの独りに命の為に走るけるのじやものを
何でも命がけにする者が一ばん強いさ

第四十 海豚ト鰮魚ノ話

いづれの時あつたけん海豚と鯨との間に軍旅起りしことありけり
戦さんする時に当つて鰮魚千万匹あつまり出双方をなだめ引分けんと
周旋しければ一疋の海豚が「足下共捨ておけなせへ汝の
如き扱ひで生るくらゐなら打合て死ぬ方がましじや
俳人に出て扱ひさ渉るのも夫ほどの威望がなければ人が承
知しませぬ余り軽挙をせぬ方がよい

第四十一 炭焼人ト暴布人ノ話

或炭焼人小屋広くして明部屋がありければ知音なる暴布人を
呼で「ヨイ君の家に僕の部屋が空いてあるから一所に住ねへ」と云ふと
「夫は有難たが汝と一所に住んで居たら君が折角暴した反物が
直に又黒く成たらう是ぞかりにお断りだ

余り畏て居る口柄はかんが中く合ねえじゃ

第四十二獅子ノ悪暴ノ話

昔或山に住る獅子樵夫の娘に恋慕して爺に迫り娶らんと乞り爺是を嫌へども大王の機嫌を損ぜバいかなる災害に逢んも計り難しとそろおいつ思案せしがきゝと一計を案出し直に獅子の許へ参り「御覧お申込の趣ハ誠に以て冥加に余る極有難き事なり升しかし大王のお歯やお爪の恐ではどこの娘も恐れまするねへハござるまい御ぎ爺くハお歯を抜お爪を剪チト男ぶりをつくろひせられへ然らバ娘もさぞ嬉悦参り我婿殿も気急くいらんと恐れくのべれバ獅子王即座に応承し（ドンナ男デモヲツコチニハナシデニモウシミシデアゴサリマス）歯を抜せ爪を剪せそこでいよく婿に

なりたいと娘の方へ出かけて来ると既に牙は仙への無きハ少もこはいゝろハないと爺急に強くなり天秤棒をおつとつて押かけ婿をたゝき出せしとぞ ○すでに爪牙を失つたる後ハまさいんすべき

第四十三風ト日輪ノ話

或時日輪と風との両方に何れの力数強からんとのせんさく有て争論果ざれバしかバとゞを言んよりこゝに通りかゝる旅人に雨衣をぬがせたらんかく力勝れりと定めんと風先術を施して至く烈しく嵐を起せバ旅人ハなほく雨衣をおさへ吹去れぬと身にまとひけり其時日輪雲間より出て輝きたる和光を放ち霧を拂ひ雲を除けバ旅人ハ暖気をおぼえしと一日のまゝ暑さを小従ひ道に熱さに堪かねて笑へど雨衣を脱すてたりとそこで日輪の

方術たり　口暴をもつて君を遂蔵をもつて人を伏せんより和柔なる切諭
して人の心を解すしかぞ

第四十四　百姓ト児輩ノ話

某村の百姓何某死するのぞめる時児輩を集め死後のことを遺言して
「吾の余ハもう是限りぢや物置が汝等へ譲ろうと云ものハ外にハ無イ只ぶどう
畑の内よ何でも出精して稼ぐがよいト云終ると息絶たりそこで児等ハ
先埋葬の事を済せさて亡父の遺言を判断して何でも亡父の畑の内
小黄金を埋て置たにおいて遺るいと各自に来鋤持出し毎日々々葡萄畑の
端から隅まで堀反して黄金をさがして見さいが更ぞと云ふ者もなしされど
葉をとり土をやわらかたる故にや汁多ぶどうの蔓葉茂り実も出来秋ぞ
なりて八例年にまさる結菓ありて利市数倍なりければ亡父の遺
言ハ是なりけりと児等初て其言を悟り弥々出精しけるとぞ

家業勉強ハ富を得る基と知るべし

第四十五　樹ト斧ノ話

樵夫林の中に来り荒樹に向ひ纓を屈めて斧柄に欲べき細き木を与へ
ねどれと乞ければ頼方ニおいてい承知ありければ木木ども領承して極下襍
なる蓁皮を渡し遣せり樵夫是を得て其斧の柄を作りそこで大木へ伐
かかると彼樹大に後悔してとなりの枝樹へ耳語するやう悪いことをしたくいさ
うふかとるしい蓁皮を彼奴の手へ渡さるゝからさ我等ハまだ生延ましく
他のふさわハ吾なさわといふ事を志る

伊蘇普物語巻之二

第四十六 驢馬ト狆ノ話

或人狆と驢馬とを畜ひけるに驢ハ遠く廐につなぎ飼ハ豆や草を以て狆ハさばかりたえず主の側に膏味を以てして時に抱れてハ膝へ上がり相玩ぶる事甚し然るに驢馬ハ狆ハ毎日遊び戯れ旦那へざれてハ可憐がらるゝに引かへ吾ハ日夜用事多くして昼ハ木を挽夜ハ車を上し背の折るゝと計り何と狆が楽で居るのが羨しけやアなハ吾も狆と同じ様に旦那様へざれ付たら彼と同じ様に可愛がらるゝだろふと或日廊下をふり切て座敷の上へ駈上り飛込ふり躍たり踊るそぶりをしてはねまハり果ハ主人の飯を喰て居る所へ跳込とせしに倒る汁ハ覆れる器ハ砕る踏こハさるゝなどハこてぞと男子驚て主人へ抱付尾をふつて口をなめんとなしけれバ給仕台所より男ども皆駈付てきて又ハ旦那の一大事と手に手に棒をふりひふめやー主人を救ひろがき打倒し半死半生に迄なしたるときは頻りに歎息し「吾ハ「アなぜ自己の本分を守らざるつまらぬ某物の真似をしてとんだ目に逢たさ

第四十七 狼ト羊ノ話

或時狼の方より羊の方へ使者以て申入るゝ口上に「いつまでも互ひ争ひ戦の基をなしましべき畢竟御辺の方に彼犬と申奸奴が有て我等を吠罵り敵意角鎗動を引起しまし彼犬共を速に追のけ候へ然る上ハ交際に付以後いさゝかも故障無ク永久之懇ニ成べしと有ければ

羊ハ何の気も付ず狼の云理もあると並ニ大を誕生すと其後ハまゐる者がなくて数多の羊一疋も残らず皆狼に喰れけるとぞ

第四十八 獅子に奉公スル狐ノ話

或狐獅子某に奉公する事を定めて己ハ餌食と成獣を見出すを勤獅子ハ是を捕る事を職とし各々の分を守り居て無拠数合が宜しかりしが漸々にして狐がまんの心を生ド云ごとて何で彼に劣るものと並ニ獣を捕免しを乞一日独りで狩に出けると忽ちに猟師に見付られ却てものにせられけるとぞ

自己の分を守る者分を守るときハ身安かるべし

第四十九 歳徳神ト路駝ノ話

むかし路駝頭に角を添んことを歳徳神へ祈り「他獣ニハいと勇ましく強げなる角有に何とて吾ニハ天恵なきぞ」と怨ドハ祈れバ神怒を発ねしずのこゝろにず却てうろさ紀奴のあと其耳を切落なひしとぞ

余り多く望んとすれバ前ニ望しものゝ持さへあいせ失ふに至らん

第五十 蟋蟀キリギリスノ話

蟋蟀きりぎりすの唱を巧妙なり吾もあんな芸を持たい者ごとキリぎりすに向ひ汝ハ何を喰るさかつてそんな好芸を出しるさるトいへバきりぎりす答て「エイ別に喰物も有ませぬ只露バかりをつて居ますといふ故ろぞか是でハ己も露たど其後ハ露ぞかりなめて居るなれバ程なくうへて死にけるとぞ

他人には薬と成るが自分には毒と成る事あり構へて人のものを欲し人の事を羨しむべからず

第五十一 ヘルキユス権現ト車引ノ話

或農夫馬に車を引せ泥濘小路に入りけるに車輪泥土の深みへのめりこみけるにさらに手も出ず其時男是を抜出さんと骨も折らずして只一心にヘルキユス権現を祈り此難儀を救ひ給へ助け給へと祈りければ権現さすがに是を見兼し給ひ忽ち天降ましまして汝徒に我の手を頼むを止めよ汝先汝の肩に車をかけ身をおこして輪さへ一さんに押べし天は只自ら助くるものに力を添へて志を扶くるものぞと教解し給ひけるとぞいかに信仰すればとて自ら勉ざる者には神佛も扶給ふ謂なし

第五十二 兎ト蛙ノ話

或時兎ども四方より敵を受て最早仕合の悪しくさも無く自滅をとるより外無と云ひつめ一同云合せて水中へ身を沈んと池の方へ悦走り此時其の蛙が池の辺りに出て遊び居りけるが今兎の群来るを見てあわてて騒いで水の中へ飛込むと見る先に進んだる兎立止り我友達よ待らせ我たちはまださうそんなに思ひ切場合でも無つさここに己達よりも落命な奴がある他人の事に比べて吾心を安んずる但し気力をつけよ何でも世には吾より衰る落命の者が有と知べし

第五十三 農夫ト鴻ノ話

或農夫蒔付ケタル田ヲ啄荒ス鶴ヲ捕ヘント四几ヲ仕カケタ方ニナリニア

往テ見レバ多クノ鶴カヽリ居テ内ニ鵠ノ鳥一羽交リ居タリ時ニ鵠ハ大声
ヲ出シテヘ私ハ鶴デハ御座リマセヌ私ハ実ニ汝ノ御蒔ナサツタ穀物ヲ
喰ハミマセヌ私ハ罪ノ無イ可憐ナ鵠ノ鳥デ御座リマス私ハ父ニモ母ニモトシト
苦労ヲカケヌ孝行者デ御座リマスレドウゾヲ免ルシテ下サリマセドウゾ御助ケ下サリ
マセトイヘド農夫ハ中々承知セズイヨイヨ首筋ヲ取詰テヘ放ヌ汝ノ云
所ハ皆誠実ナラウシカシ汝ハ穀物ヲ荒ス奴ト一所ニ網ヘ捕タノダカラ
汝モナカマトトモニ難義ヲミナケレバナラヌ子ヘ

友悪ケレバ身ヲ守正シトイフトモ人信ゼズ

第五十回 釣師ト小魚ノ話

或者ハ小魚を釣て生業とする者あり夏日終日釣をしても取獲
なく夕方になりて帰らんとする時漸く小鮮を一尾釣り上たり其時小鮮あ
われる声を出して御助け下され私はまだ小さうで厶ります中々食料に
は成ませぬ是非河へ返して下さりませ私が大きう成ましてうまく合になる頃
になりますと必ずまたへ参りまして又御身にかゝりますといへど
釣師首をふつて否々吾は汝を捕へ為もし汝を水の中へ返し
たらば其時汝はサア捕て見ろせいぞよう

諺にいふ手中にある一鳥は林の内の二羽にも勝ると云ぞや

第五十一 猿ト駱駝ノ話

或時走獣の大会ありし時猿席上に於て所謂猿楽を奏したり皆々
是を見て興に入り喝采することまびしく其時駱駝勃然として立上り

屑ぎに踏棄を始ると誰も是をみるに堪ず果ハひとしく立くり拳を
揚ておるやませりまへの外へ追出しけると
読子其のくるしみより外へ手を出せるところあり必ずぞ
自己に不應せぬいふざる所業をなすことなかれ

第五十六牝獅子ノ話

或時毛蟲集りて眷族の多きを誇争ふことありしが其論功事ニ于
付ければ遊子獅子とても多小さくべんと群獣獅の洞窟に来り先獅
子に向って汝ハ何疋子産ありやと云ふ牝獅子目を怒せ眦を張
私しハ唯一疋でも此雄児があります
賤悪くして数多くしんよりいつそ少くも貨の好ん方勝之

第五十七薪ノ束ノ話

或翁又家の児兄弟喧嘩して家内のおだやかならぬを憂へ是を和睦させ
ようと種々に言葉を尽しけれど安入せぬを依てたとへを設け是をさとさんとするの
を工夫し或日家の翁兄弟を呼寄て薪を一把持て来いといひ
付たり扨て児兄弟薪を持来りたれバ緊く是を束ね此束を折れと
云付たりよって兄弟代る々に手をかけ是をかけて折んとすれどもおれず
そこで翁ち束ねを解き各々へ一本づゝ与へて是を折れと云付たり此度兄弟
易く是を折たりこの時翁又兄弟再するぞそれぞ丈ぢら吾児よ
汝等中よく合体して居る内ハ力が強く防ぐに充分なれども一
旦分裂になる時ハ力が弱つてあるふたゝねぞ以後ハ要して喧嘩をする

なとねんごろに戒しめたりけるとぞ　○同心合力ハ勢を生ず

第五十八　武士ト獅子ノ話

或武士獅子と連立て歩行けるが互ひに力自慢をして人々がつよい土獅子が強いと云募におよびし路傍に勇者が獅子を踏へて居る石像の立て有を見て「コウ是より汝の方が強いと云ふ証拠がある」ちく「夫ハ手前勝手の云方ぢやもし獅子が石工で有ならバ人間の足の下ニ一疋の獅子と云ふ処へ獅子の足の下ニ二十人の人間でござう

人ハ只自分の方へぞり都合の好様ニするさ云者ぢや

第五十九　乳母ト狼ノ話

或夜狼餌をさがして東西歩行し折り或家の窓下を通りかゝると丁度小児の泣出すをしかりて乳母の叱る声が聞へたり狼何事ならやと佇立り耳をバ欹て是を聞に乳母の声にて「此坊や泣るさんなら出すいと狼に投与ますぞト」いふ故狼喜めたり好き獲物にあり付たと独り小躍して待て居るとやがて夜も更児も泣止めバ再度乳母の声にて「今ハ好児ぢやもし狼が這入て来たるならお殺してやるぞ」ムお殺してやるぞトいふ故狼ハ全で当が違へそこで狼ハ山窟へ帰るのが遅く欲を彼が愿へさとつぶやきながら急て山へ走帰りけるとぞ

人ハ多く口でいふ事と彼でおふて居ると表裏のものぢや
諸君油断をなさりまする

第六十　猿と海豚ノ話

昔日ハ廻船ニ乗込ニ稍猴を携へて船中の無聊ニ慰る風習あり
或る某人海旅ニ猿を連て廻船ニ乗込しが其船アッチカ（きりしやの地名）
の「スニユーム」といふ岬を乗廻して既時颶風ニハふ吹起り船覆り乗組
ものは皆海中へ落入たり時ニ海豚猿の海中ニ浮沈つゝあるを見て人なると
おもひ之を救はんと思ひ猿を脊の上ニ乗せ岸を目がけて泳行しが
やがてアテネ（きりしや都の名）の港なるピレースの向へ近付たりし時海豚猿ニ向ひ
て「扨汝ハアテネのお人でムるか」猿「ハイさようさそこの有名なる者の一人で御
座る」「左様ならバ汝ハピレースを能知て居るぢや」猿ハ其の言込るピレースを豪
家の町人の名と心得「ハイ共ニ私の最も懇意な朋友の一人でござる」と
いへバ海豚ハ猿の詭譎ニあきれ果て「足下の様な詭譎人ハどふでも

なる身なるが故下いゝて波底ニ沈ませけるとぞ
知ざるを知れりとせよとの聖言を書ふむ者がいましむる猿利口ぞ

第六十一 大小溜し猿ノ話

或猿大ニうまれて大よりおもき動をすることができず一日草ニ僵臥
通りかゝるのを見て其のからニ水を持てきて貰ひ度と思ひ臥ながら
声をかけて「モシ足下が水をさへ持て来て下さらバ今日抔ハ自分がつれ対
ますのでおれを申ますといへバ草中ニ埋沢せざる猿そをでござり
ませう僕が我を持て坐つと傍邊へ寄りますとそこで其兄の咎抔がで
きるのでござりますのト

平日他ニ畏悍る者ハ困る時ニ柔和ニしても人が中々在寄ませ

ぬ実は又よろしきと云ても悪人は油断がならぬものて御座ります

第六十二 燕と鶴の話

燕と鶴と出合イヤ吾が好なるじや何吾が義なるぞやと云争ひ果しなかり
しが鶴大音をあげて「汝の羽儀のは甚斗り吾の好のは何年でも変らぬぞと
耐久の好のは観美の好より益じや

第六十三 燈火の話

大集会の時十分油をそゝいで光りかゞやき飛る燈火満座の中に
育て「ナニ日や月や星なども吾より明るからう」と大言を揚ふと折から風が
発と吹て来て燈火忽ち滅れたり時に一人火奴で明を点けるとて「コウ
光んなせへ燈火以来口を出さるさんな天の照りは決て吹滅ぬぞや吾照へゼ

前後見ずに余り大言を揚ふと忽に恥をかゝさるゝ者じや

第六十四 牧人と家牛の話

或牧人家牛を失つてどこへ行たやらと山や林を尋ねあるけど見当らぬ
故に尋ねあぐんで何でも此に盗去たに相違ないと山の神や土地の神へ
祈をかけ「盗賊を見付る事が出来ましたならお礼に羊を一ツ献備ま
せう」南無大明神南無大明神と祈るが今東又西へ巡歴あるきしと或山
の背へあがると狼子が失た大牛の死骸を押て喰さんとする所を見出
したり牧人是を見て驚き慄し南無大明神此災難をのがさせ給へ先にけ
お礼に家牛を賜奥へませうと云けるとぞ

神佛への祈す事が悪きた迄届きにはなるがさぞや多くの人

が自分の欲たので困る子が出来るたびに

第六十五 橡樹ト蘆ノ話

或河堤に生長たる橡樹大風ノ時に根返りして河を流下りけれバ河に
云ふに茂り居る蘆を見て「是ハいかに斯る細く軟弱なる物の嵐に保
ちたるハ不思議なり吾如き太く強き者の堪ざりしに似ざりきとつぶやくを
蘆遥に答えて夫ハ様子の強きにふみ此辺ハア損る嵐に逆て只一寸も
不曲るまじとせられし故吹倒されたるなり吾ハ種々の風にさへ伏て曲りつ
さかる故いつも安難に候ぞと云ける

第六十六 水星明神ト樵夫ノ話

赤貧のきこりが一日河畔にて樹を伐り居たりしに過て斧を水中へ取落し
忽ち生業の資本を失て狼き哀しむる限りなし其時河の守護神
なる水星明神忽然と顕きぬひきこりの訳を詢有て速に水中に沈
みしがしばらくして金の斧を持出給ひ「汝の斧ハ是なりしやと問給ふ樵
夫是を見て「否是ハ僕の斧にてハござらぬといふ神又水中に入り此度ハ銀の
斧を持出給ひ是こそ汝の斧にて有べけれと云給ふきこり是を見て「否
是にてもござらぬといふ神亦々中へ入鉄の斧を持出給ひ是なりしやと
問給ふきこり是を見て踊躍し「是こそ僕の失たる斧にてござる嬉
しやと云ければ神其正直を賞給ひ鉄の斧へ金銀の斧を取添てひとしく
きこりに与へ給へり扨此きこり夕方になりて村の内へ立帰り着し事だを
仲間の者へ話まと其内の欲の深い男が己も同じ利運が有付度物だと

又此日に同じ所へ往て樹を伐採をま似して斧を水中へ投り込てぞと
河原に打伏ていとゞ悲しげに侘居たれバ水星神果して出現在て其
の訳を問玉ひ忽ち水中に入玉ひしが黄金の斧を持出給ひ汝の
斧ハ是なるや卜宣給ふ男あつて首をさし出し「是でなし我が失たる
斧にてはなしとて強て攫んとなしければ神大に怒り給ひ其邪曲をいたく悪
んで金の斧を授けられぬのみか前の落せし斧をさへ返し給ハざりけりと

此典こそ慾を戒るよき手段なれ

第六十七 鶴ト雁の話

或日鶴と雁と同じ畑に降て餌をあさり居けるが忽ち猟人出来りたり
鶴ハやせて軽き故是を見ると鼓翼して唯一途に飛去りし雁ハ肥て
重き故急ぎにげ去る事が出来ずつひに猟人にとられけると

世の中騒動ある時ハ重きものより軽き物こそましなれ

第六十八 獅子と他の獣と狩に出し話

獅子と他の獣と狩に出て肥たる鹿一疋を獲り其時獅子自ら行司と
なりて是を三ツに引裂て扨云けるハ「拙者獣長なれバ役料として
先一ツ引取べしさて次ハ拙者狩に加りたれハ自身の取分として又一ツ
引取べし第三分に至りてハ誰にもあれ吾を背く者是を引取べし

威勢の盛なる者にハ我意の振まひ多き者と志れ

第六十九 蚊ト牛ノ話

牛の頭の廻りをぶん〳〵鳴て飛る蚊が角の上に一寸止り「牛さんまつひら

御免なさいモシ私が来てた迷惑なら出て行ませうどなぞさふ作つて
下され（何）汝が出たとて君の頭への迷惑に成ハしませぬイヤモシおたちなる
さふともお止りなさるとも御勝手次第実膝をすゝめ申さふならバどこに
汝がござるのじやかしらも知やアしませぬ

虱が小けれバ虎も亦小さい

第七十　神佛天上に會合ノ話

歳徳神海三権現弁財天普賢菩薩天上に會合せられ時各法力を以て
能調へる一物を製作さんとの申合ありけりそこで歳徳神ハ人をこしらへ
弁財普賢菩薩ハ家をこしらへ海三権現ハ牛をこしらへる時に證據なる
なる者いまだヨリンピユス（ぎりしや）ノ高山より来會なさ𛀁りければ幸ひ普志を判

者の役にあて右の製作が能か否か閻君が云といふことを定めさせ
んと頼まれたりしに私なく普志弟しまれバさらバ裁判をして頼れと有
たり普志其を見てつくづくと打笑ひ先牛を指て曰其角ハ敵を突時に
目の前にあるがため眼の下に有てよし次ニ人をさして曰心の邪正の見
ゆる為に胸の辺りに窓あり度ものぞ次ニ又家を指て風儀の悪い隣
家をさけんが為に車を附させねばぞと云ると歳徳神が腹立
ふて普志を座より引出し曰あなを云ふ奴ハ捨てすてけれやアしれぬぞ自
分が一ぞんで好ね物を拵へさせ上て他の者の目見をおがいて

第七十一　日輪ノ妻迎ノ話

極熱の時分に日輪妻を迎へ給ふとの評判あつて鳥も獣もめでたしと

礼し蛙も共に飲合けるを古老の蛙が突込で眉をひそめ是ハ申て欲には
てるゝハ露へ座きるのたぐら掴りの時日さまでさへ堪られぬ路泥を乾上ゲ
さらるゝのに小日輪さまが世上副さらやさらに我等がどふ成事ぞ
暴君の民に厭ふるを如斯いくんぞ遺隆あることを欲せられんや

第七十二 盗人ト母ノ話

或年若き子手癖悪しく朋友の筆硯るどを忍むく盗ミ持帰りしが母叱り
ハせずして却て働き者なると誉けり其子成長するに従ひ盗をし次
第に増長して必至の物をさへ盗よふになりしが果ハ公の手にかかり
法場に引したりしを附母ハ哀しさに堪ず嘆くにもして最後の見とぶけ会
催ども申さんと群集に立まぎれ後に尾つき往けるが其子ハ目
早く見て手て附添の役人に我念ひ彼方に来る我母へ何卒最後の一言
を遂せ度と云ければ右とも云とそ許されたりそこで母ハ涙を拭ひ何ごとを
云ぞをいざや申されよと云るが耳を口に寄せと云へさし寄れ其子ハたぐ
怨めしやと云一言にて母の耳朶をくひきりたり此騒にて人々打寄母をいさ
より命抱して実子は汝の息子殿ハ人でなし今までの罪は極至て此
度の事ハ大悪無辜といふて罵りさわぎ乖るれば其子静かに答へけり吾
列位左様に作するなれどそれに知らせまし国ハといへば母の過る私
が未だ幼少ときに朋友の物を盗ましものを厳しく叱つてくれたら今日
の事ハ在ませぬあゝ怨しいと云けるとぞ
悪る芽をバ萌芽の内に摘切るが能何でも棒を手にそうに至

て児童のせつかんを怠たるか

第七十三 猫ト鼠ノ話

猫年老て壮附の様に鼠を追駈る事が出来ずそこでどふかして手の届く所へ鼠を誘ぜんと思ひ自ら躰を袋に入首と手足を出し死たる猫の吊されし様に見せて低架の棰木へ足を踏かけ手を下へつき倒懸になりて息を殺して居るとやがて老鼠二疋天井より降来て遠くより是を伺ひ中に傍へハ寄も躰で一疋の鼠が友鼠に囁き云ハニア今まで幾つも袋を見たがまだ猫の首の付て居る袋を見たことハ無 左様「イヤ姫公いつまでもそこへ居た待ふさがつてござれたとへ逃がらぬで詰ふなうさとても手の届くところへハ一生往ハ志ませぬ

老鼠ハ糊をつかまりハせぬ何でも年が寄てハ分が付てくる者じや

第七十四 獅子王と相談ノ話

獅子王羊を呼よせ我息ハ臭やと問羊答て左様でござりますといふと獅子王罵る奴じやと云て其首を喰切たり次に狼を呼我口の臭ハいかにと問狼答て否て佳香でござりますといふと獅子王ます〳〵怒て我諂諛ものめと云てすぐに引裂たりそこで其狐を呼てが息ハどんな臭ぞやといふと狐畏つて臣ハ千頃冒風でござりましてとんと臭がききませぬ

利口の者ハ危いときに何とも云ぬものぞや

第七十五 一雙ノ壺ノ話

或河に一雙の盃流れ下る所一ツは陶にして壱ツは唐銅なり唐銅後より声をかけ「其イ陶さん何と我等同伴に参りませぬか然れば俱へおよろしい私が保護上るから「といへば丈夫有難う存るがしかし夫れが私には一期の禁物でござります汝が近くよって寄て下されば私は無難で居り升が是迄汝がそばへ寄て些とでもおさへなさると私は忽ちまいって仕舞ます

余り強い者の其辺へは寄らぬがよいといふものが出来ると云

でも弱い方が損ぞ

第七十六 医者ト病人ノ話

何庵とかいふる藪医者或病者を預りしに例の技倆なれば治療叶はずして病人死亡り葬礼の日に医者も野辺の送りと共々供に立て「アヽ

世間様も酒と羆へ養生を能なさつたならば今日のことは有餘まいと云ば施主の一人が勃然して放猫者のた云詞じやが夫を命令しやるのは吾ども千万なせ当人が生て居内に手本をおみせなさらぬ

好勘弁は兎角後期から出る者じや

第七十七 荒鼠 団議ノ話

或鼠どもが猫に手ひどく苦められ其害をのがれ好手段もがなと一家荒鼠会合をなして商議を初めたり其時座上に於て種々の献策有てまゝ論議を遂られたれど是ぞといふ謀計も無し然るに最後に至つて遥か末座より一疋の小鼠が這出いと驕色に申立る様「我輩の彼猫に然らば畢竟彼の手首を志ばらして各

迂闊なる故なり依て其後ハ彼猫の項領に鈴を付んと思ふ時ハ
彼の来る事知れ易くして我逃ること遅からじと元来其謀計を変て惑ふ
くし異口同音に可然とぞ同じける其時傍に黙然として相居る老鼠
手を出て申さきつと君後して独静に申立る様ハ其策極めて妙なりその
功効も亦甚明なるべし但し茲に尓り度一事あり誰殿が猫の項に鈴
を付に参らるるや　○議論ハ議論実地ハ実地なり

第七十八　獅子ト野羊ノ話

三伏の夏の暑さに堪兼て生類のたえ入ばかり清水の湧出る処へ獅
子と野羊と同時に水を飲に来てイヤ吾が先じや汝ハ後じやとあらそひに
互につのり果ハ喧合掴あい死とも厭じ負じとひとつ争ひ来たりけるが
余り息切堪難き故ざんじ双方相引にして頭の上を見上げたれバ一群
の鷲鵰其をのして孰でも死だ方を餌にませうと飲鋳をして居る故急
獅子も野羊も始て氣が付「イヤ是ハ争ひに夢中や鷲の餌になるよりハ
是からは中よく致しませうと再ひ喧嘩ハせざりしとぞ
外寇ハ内憂を待つる処の一助なる歟

第七十九　鶩黄金の卵を産ノ話

或人鶩を飼しに日々黄金の卵一ツづつを産り主人是を歓ぶ事限り無し
雖然かく日に一ツづつにてハ益の付方甚遅し如かず一度に銭を得たらんには
かと思て鶩を殺して腹の内をせんさくするにさらに常の鶩にこと
なる事なかりしとぞ

日々少しづつの儲分あるが種やまるん余りあこぎに儲んと
せしると本銀までも失ふものなり

第八十 饗餐に招かれし犬の話

或大家饗餐を設け友人を招きしに友人の飼犬も主人の後に尾て同く其家に入来り其時主家の飼犬も我主の端に立て友犬を出迎しはふお出なされた今晩は近ごろに山海を食ませうトいへば客方の犬礼をのべちそふの手を忘の有のを見て「イヤア盛んなる御料理だ是は好時候に来りましたと悦んでいきまして今晩は多量食を忘ませう明日は何も食ぬが有ますまいからト独言を云ながら嬉しまぎれ尾をふると其ふつた尾が料理人の目にとまり「イヤア是はどこの犬だトおゝきと寄て引つかまへて窓の外へ投り出ますと其家の犬が狼狽るを聞ありどんな佳味を食なさったとたずねが投り出された犬痛さをこらへ途方ひとするが「私はどふして内から出たか忘れぬほど飲過たからイヤもう絶きました

他の尾に附て来る者に窓から投り出さるる憂が有ぞ

第八十一 蛙の主人を求る話

昔或池に群蛙住ていつも澄やかに心任せ成しに互ひ我慢の振舞まさりて治り難く成ければ一日蛙共集り天を仰で声々に「我等を統ひきいるべき主人をあたへ給へと願ひ訴へたり天神是を聞給ひ憐れもあきれたまひて只一本の丸木を天上より投下し給ふに其水をおし波を揚たる音いとすさまじかりければ今迄おごりさわぎ居たる蛙共

おのゝき恐れ水をくゞりて皆泥の中に潜みかくれしばらく出も得ざりし
がやゝて先がけの蛙ありて水の面へ首さし出し事の様を伺ひしに
柱の傍らのころなれバさしも猛き主人のきざしを識らんと猶り柱へちら
附を他の蛙ども遥に見て我もゝと漸く出柱の側へ伺候せりされバ
固より無心の木なれバ蛙ハ次第に恐懼を忘れ果ハ主人へ跳上り狎
侮ろにおりし時蛙ハかく主人のおとなしくして氣力のなきハ甚だ
の事に思ひ再び天を仰で何とぞ他の勢ある主人を授け給れと祈
願へ申たり天帝是を憐みひ悪き奴等が祈ると一羽の鷺を送り給ふ
其鷺下界に降や否や来て蛙を喰ひ初め次第ゝに喰となしければ蛙
とも驚き恐れ天を仰で哀み歎き何とぞ嫌ひをたれ給へ救ひ給へと
大聲をあげて天帝を恐れて蛇をまねバ天帝ハ是を憐み今汝等の
天罰ハ則自業自得なり然しバ此後ハ打合てたがひに中よくせ
よ悪を逃まして天のあてがひを分ととして益もなき事を祈ると
詠んごろにいましめ給ふとぞ

第八十二驢馬ト主人ノ話

或ろ云最初百姓に飼れりゆに躰弱く且骨がおれて動づく思ひ歳
傍権現へ祈をかけてどふぞ此辛苦を救ひ給へ他家へ移し給へれと祈
ければ権現聞き取くるとて是を瓦屋へ遣しなふ固てろぞハ以前より
重荷を引き骨がおれて堪ふれずここで又権現へ祈をかけて何とぞ此苦
難を救ひ給へ先まけ給へと祈なれバ権現またゝ怒りたまひ今度ハ革屋

工送りぬふ所ろぞハ主ゟへせすまる所無ふ賠し造化が悪くなり背の
おれ々さもましれれバ或日主人の仕事をして居る處て歎ぞく
していふ様「アヽ吾など運のわるひものハ何ぞ以前の旦那へ奉公
しさが一ぞん好さけ已が当時勤めて居る旦那ハ生て居るうち
残酷つかしやる計りぞや死ぬへ死ぞ後も免さつしやらアヽあるれ
一ツ所ニ安まる事をなしぬものハ生涯なん辛つゞし一毎
化所へ移る度毎ニ不運ふなる者じや

伴苦善物語 巻ノ二終

伴苦善物語 巻ノ三

第八十三 盗賊ト飼犬ノ話

盗賊盗をするきんと某家へ忍いりし小飼犬目を覚して吠ければ盗賊
より握り飯を出して投たりを喰ふすると犬ハますます大る声をして「か
れ手じや汝が去前ゟ奸漢だと知つて居さが果して此様
る人情があるかイやいよく曲者ふお遠なひ

賂賄ハ何ふ邪曲のある事をあらはす

第八十四 告天子ト雛ノ話

麦の穂の繁茂れる頃畑中ふ巣を作り居るひばり有しが其母
いつも餌をあさりふ出る時ハ留守ふ有さとをバ語つされまは必ず告よと雛

小云付てハ出られたり一日母者が例の通り出られる後に畑豆が出来て近々
を見足しるから親子麦の実入ハよいぞ今年の麦を頼んで刈せねバなる
まいと独言をして居れりやがて母者が帰り来ると縁者がお出て「今日ハコウ
く云事を申ました「サアどこへでも親共を相頼しるさいといへバ「成程麦の
もふ刈入時じやが少し旦那が今迄の気へ任せて置きなさるならまず少時
ハ見ざが宜さんるに損損ハ及びませぬと云て置ぬを次の日も母者が出
た跡に畑豆が見廻て来て麦の登が十分出来さのにまだ刈らぬさるを見
て「成ハ置されぬぞとても今年の麦ハ任せてハ置れぬ親共達へ手伝
を頼んで急ぎまして刈ねバ成まいと独り云と云るから遠遠くの畑中に
居る息子を呼て「コウ群従や読文に昨日ハ来て手伝て貰ふと云てこい

とて居りやがて母者が帰り来ると縁者が驚いて様子を聞くと一ヽ
咄せバ母者ハ恐ろしき気色なく「ヨシ夫じやまだ事をひハ無アノ親類に
ハ自己の刈入が有て忙しいだが其後旦那が来て何ぞ言ふる人に頼むと
まだ宿て居て読み云ふてさせるがいいと云て置ぬを翌日母者ハ例の通り
出られる跡へ畑豆が来て麦の穂が倒れると急くさのにまだどこにも
刈て居る人がみへぬ故根をつぶし大急で息子を呼出して「モウ是
此の麦ハ待れぬへ親類にも任されぬへ汝ア今秋遠りの刈手を雇つて
直け明日ハ急度自家が出て刈入るぞと云て居るやがて母者が帰り来ると
縁者が居て今日ハ如此云ましたといへバ母者ハ肩をひそめて「ムー
夫じやア巣に立をまする時が来た何でも他に任せずて自身に手を下すのハ

あんまるねむらぞ如ぞ沙汰させぬがいゝ

第八十五　喇叭手勇ニ敵ス話

某地の軍敗れて喇叭手勇ニせられんとする時頻りニ宥免を乞ひ「どうぞ助けて下さりませ私ハ今迄敵方の者を殺しましたことハござりませぬたゞ喇叭一挺丈のものとて外ニ持ハ者ませぬと云ハ敵の兵士答へて「夫だから汝ハなほさら殺さるゝけれバならぬ汝ハ自分で戦ハぬも全くせバ他を鼓舞ちや激やかしたりして死るやうにする者の人をおだてゝ悪事をさせる者ハ自分で手をおろしてする者より
も罪がいかい

第八十六　鳥ト獣との戦ノ話

或日鳥と獣との間ニ軍起りて長く久の間勝負定めがたくぞ見へける時蝙蝠ハ鳥ともつかず獣ともつかぬ形容を見たる者なれバ云ふ卑怯な工夫を立て初めハ両方中立して旗色を見て居るがやがて獣の方勝色になるを見て獣の方へ組加りて戦を助けけり然るに鳥ども力をあハせ返して戦ひ遂に獣の方を打破り鳥の方勝軍になるになれバ蝙蝠ハ又一つ旁く獣の方を去りて鳥の方に来まぎり獣に向て戦ひ居なり扨軍も余りニ永引て互ひに労れたれバとて一時和睦に取極りたる時鳥も獣も蝙蝠の二心ある行状を訴て双方ともに同盟にハ入しぞして以後ハ白日に出るをならぬと厳重に申訓しひ後しそれ夫より後蝙蝠ハ終のつまやきてゐるげ鳥洞穴に潜揺みて責

會小のミさまよいあるき眉を挟く世を渡る事とハ成ける

人も無く義もなく信も無心底ニ定らずして左右へ身を寄る者ハ果ハ誰にも悪まれて身の置所なきものぞ

第八十七狼へ羊を頼んだ牧羊奴の話

或狼牧日ゟ牧場の手辺を徘徊り居たりし小羊ニハ是でと云害もせずして通り居れども牧奴ハ常ニ其狼ニ油断せず油断の用ひをなして遠張て付け居たりけるが幾日経ても狼が羊ニかゝるけしきもなければ牧奴ハ安心して油断の念を止めて後にハ朋友の様に附合て至極こん意ニ成る振ニ於て或日牧奴ハ市街へ行ねばならぬ用が出来て羊の事を狼に頼んで出かけてやがて帰り来て牧場を見れバ羊ハ殺され狼ニくまれ居たりそこで牧奴ハ胆をつぶし後悔して云様ハ吾ハ愚奴だ狼ニ羊を頼んだ故る証生だ奴を

發頭歎より同盟だと云て居る者の方が却て油断がならぬ

第八十八二人の同伴斧を拾ふ話

甲七乙八と云大工が連だち往て仕事ニ往途中で斧が地におちてあるを見つけ乙八ハ早く手を出け「ヤア吾ハ好物を拾ふたといへバ甲七待と云て「コウ乙八汝吾ハ好物を拾ふたと云ふまる義理だや有めへ両人同行の事だから我等ハ好物を拾ふたと云ていふ筈だ分て出ふせ「トいへバ乙八中々承知せず彼是論律をするうちに一二町も行と後から斧を失ふた人が追かけて来て「ヤイ盗賊め胆太やつだト罵人て追捕したけれバ乙八大ニ狼損て「ヤア我等ハ悉くおわろうトいふ故甲七も呆とて云て「チット我等と云てもよろしからめへぜ吾といつて

下しなぜと云てつんやア最初明友へ分るのかいやさと云さぬが此雖が
ふりくつて来ると一志よふするふとかおしがふて〈へサ

何でも楽を分ぬ人ま憂を分つ者ふるい忠義の時明友の
助けをいふくふが益の射さ時求も丈夫意の分前をするがいく

第八十九 蛸ト鰞の話

或頃蛸と鰞と云し軍をなせしが蛸の方いつも負りそこで蛸たが舎
合て軍評定をして云けるハ畢竟味方ノかく打負る由来んハもと軍法
のとくのかざる故なり依て此後の戦ひまかおっとそさる指金図を云て我等一
同そ令を守んと示笑一決したりければそれく勇る強蛸を急ぐここで役
くふなしてけり頼此度急ふうふて指金図小あされたる蛸どもハ己の役のた
先きふ誇り威出け立派の装飾をなして部下の者ふ威を示さんと示さ
飾をなしけるが頭目の者るしもってハと同役たる云合せて額ふ長き双角
様の前立のもぞ附たりける扨て手下も調ひし時軍再度初りければ蛸
ともハ勢ひ競鰞どもふ向て戦ひたり然るふ又此度も鰞の方勝利まて
蛸の方ふおぶれければ残蛸どもハ一ずく穴の内へト逃籠るそこで頭蛸も
叶じと同じく穴へ入んとせしふ前立ものが邪魔ふなりて急ま逃込ずが
できず右往左往ふ逃迷ふ内ふ鰞たが追て来て一疋も余さず含殺けるとぞ

何でも世の中ふ危げのない高位顕官ハ無ものだや

第九十 童児ト薊ノ話

童児野へ拾ひふ往薊ふ觸て刺れたりければ孩母の所へ泣て来て「イヤア

其へさがりましたらそれが私をさしましたトいへバ母「我児それハ稍(ちつと)さはつたからさされるのでハ後からハ薊をお捕るならぐつとおつかみなさりやア
どふもしやアしないよ
何でもおそるゝハぐつといふ気込でやるがいゝ

第九十一 鷲ト鴉ノ話

或時鷲が高い岩の上から一落にをとし来て羊児をひつさらひ飛去たり それを見ると傍に居た鴉がこの伎倆(てぎは)をうらやましく思ひ何の苦にもできぬ事だと ふんおれの力を出して牡羊の上へ飛下りむずとつかんで揚んとすると羊が中々自由にならずそこで捨て飛上らうとすると羊の毛の縺(もつれ)に引からまり飛揚る事もできずそゝめき騒いで居ると牧奴が見るのに気が附て来て捕て押へながら其羽翼(はね)を剪去ておき扨夕方に歸てから鴉を家へ持て帰て童児(こども)の玩具に出してやれば「ヤア父(ちやん)や持てきた鳥ハ何だエト云ゆへ「ナニこいつハ汝が問ハ我ハ鷲(わし)でござりますとぬかすであらうが己に云せりやありや何でもねへたゞの鴉よ

第九十二 老人ト死神ノ話

或老人が遠方から大束の薪を肩に擔(せをつ)て来たが途中で疲労(くたびれ)て堪(たま)らなくなり其を投ハ薪を投(おろ)り出して「アゝこんな苦辛(くらう)めをするくらひなら死だはうがましだ死たいものだト独りごとして休憩(やすんで)て居るとドロドロドロと拍子で死神が眼の前にすつくり立て「私ハ何の用が有て死たくると申来トいふと「まつぴら御免成い今迄の通り薪を肩ましてもどふ

猶生て居らふござりまする
兎角気短な人や老人なぞハ死たいの引ヱて貰ひ度のと迷言云ふ云者じやが死度と云のハ其時斗りでサア引ヱてやろと云れるとまつぴらご免じやと云ヲけれども実ぞうか死度のなどく云てハ必云ぬがよい

第九十三 捕鳥奴ト山鳥ノ話

或鳥さし羽子を掛て山鳥を捕獲たり其時鳥悲嘆哀號をして「旦那公どふぞ放して下さりませモシ放して下されバ私が他の鳥を招ねてつまて集りますといふと「イヤどんなことがあろうとも私ハ汝を放しやアせぬ汝へぞぶん友鳥をたまくらかさせよふなどく云奴ハずいぶん死でいくヲけれど

第九十四 驢馬ヲ誑誘猫ノ話

或日ろばと猫と約束を定めて狩に出しに途中で獅子に出合たり猫ハ猿猴が迫近て来たのを見て獅子の方へ跳付て低い声で「大王私を助けて下されバろばをお手に入させませうと云ければ獅子そうとも承知したりそこで猫ハろばをだまして或穴に合ひ所へつれて来てサアといふと獅子ハろばの方ハ大丈夫だと最先猫へ飛かかり終に友獣とも倶になしける
どふして友達を売り又裏切る者ハ天道様の御捨て置しめるものか

第九十五 樅ノ木ト覆盆子ノ話

或日樅の木が覆盆子の木に向ひ「実に汝ハ何にも御役へハ立ぬ奴でるそれハ家でも小屋でも建もの、ト自慢するといちごの木ハ謙遜ながら「菖公モシ其丈が斧や鋸を持て来て汝ハ何の樹だと問ましよるから

我ハ擬でハ御座りませんいちごでござりますとやしめるだらう

卑下位で安楽の方が卑上位で危殆るめをするよりもましぞ

第九十六 鹿ト野葡萄ノ話

或鹿猟人に追詰られ野ぶどうのこんでいる中へかくれると猟人ハ一向に志らずに行過たり鹿ハ其を無に安心をしてぶどうの葉を喰ひけると一ぜん語りを往猟人がもりをいふ声に気が付とつて返や鹿がこゝに居さるト鉄炮の中へ矢を射こめバ鹿ハ手矢に中て苦しい息の下から我ハ恩志らずたゝこんなめに遭ふのだ危い時に救てくれたぶどうの葉を喰ひしから

恩を受て恩を志らぬと言ふ者が有過を逃しやらぬぞ

第九十七 守銭虜ノ話

或守銭虜有りハ衣裳什器ハ大雑あり絨雑及田畑ハ人に貸ておへ随ふをず不論を売代ふして金で添く畫て金のか上来ぬやとをこで持て居る抱き掛地を掛ひ夫ぬへ人志れず埋く添く穴を堀て其を金をこれへ入置たりされど何分安恣ができず故毎日其所へ往て眺中ていたぞくと楽しんで居ると家で遣つて居る職方の一人が何ぞ有筈ハ怪しいると考付て或日翁の跡を附て行倒のけ兄が隠て見居ろと其ま入遣りて其金を引ずり出し盗みて逐電せり扨廿三日も翁ハ例の通り見舞に出かけたが平生に替つて金がなし翁ハと胆をつぶして大声をあげ泣叫びに手を迫りて大勢が駈付て何の訳でござると

家出した私が形も事情も分りた故「イヤもうお泣なされるなと云
ふけるが今の代り尾碍でも入て立て今ぞと出て毎日おもひ出され
いつも申ねおるが今も右も同様で法なく
一生遊命に捨て居る斗りおや今根の徒ハ無く嘆ふ故
ふこそ手て働きが其價になるのぞや

第九十八 老寡婦ト雛婢ノ話

或儉約な老寡婦が雛婢壱人ヲ仕ひ居けるに何でも早起ハ善が
付と毎暁一番鶏がうたふと起て下女を頻りに呼覚す故女たハつくき
ことに思ひ畢竟彼鶏めが早くうたふ故だと或日壱人云合せて
雄鶏を志め殺し志ぬ形として居ると三晩くり主婦は催せぞせサア
時計が無ふてさる麻忘れて居ないハト毎暁時を告遣へて早ッ起
まぎ夜中りしさハぎ立て「サア昧旦だぞおきろく
余り狡猾に働きると智恵まけをする者じや

第九十九 獅子ト熊と狐ノ話

獅子ト熊と鹿の死骸を見付て一度に我物にせんと猛暑延合ひたりし
がやがて双方共精がつき力が援てどうする事も叶はず両方に軟弱に成
て倒て居ると狐が樹陰より見済して突と走出し獲物をとり去ッた
跡往きへ獅子も熊も是を見てたに歎息して「イヤやれ残念至極なりしさ
どこもかこも底たらけ自分のずに上ハ立ぞ剣にあんる弱欲ハ領を奪ふ
るとハ残念至極以来ハお互ひに中よくして此般事ハ堅くして志ますまい

第百 獅子ノ病氣ノ語

或獅子年老て病氣付頷合を離てできず洞の内に閉籠居て
少壯ときの事を思出し常くしい低声で何ぞでは病も直るまい生るとは
何證出来ぬト猫云を志さりしを獣共が洩聞て扨は我等の為に安心
なり云かし氣の毒な扨じや看病に行ねバなるまいと追々洞へ見舞に来れ
ハ獅子ハ臥居るが其を誘寄ては兎詐り寄ては噛頼りに好食物
に有付た故逐日肉が付て来て日増に快方に赴たり然るに狐ハ獨り
未の様子をあやしく思ひ其実否を採んものと或日獅子の所へ
見舞に来て遠くより會釈をなし「大王には不快ハいかゞでムるといへバ獅子
臥て居るが愛答して「イヤ足下でハ在たく能来て下さつたなぜそんなに遠
に居るさるかずつと傍へ寄るさいモウ世ハ狐くも居ぬ世老獅を慰云
て下されといふと狐ハあちこちきよろ/\見廻し「イヤた様るにハ大王に
ハ遠れませぬ お帳中まで大王私を構はぬ奴じやと仰やつて下さりまする
なぜと云て他ハみんな僕の弟まお始め皆衆の足跡が帳内の方へバかり
向て居まして私へ出た足跡がとんと見へませぬ何と安心ができませうか
都て物事ハ入るに易く出るに難き物なり丈夫なれバ何でも深入を
せず先ヅ入口は深察と勘弁をするが好丈が通例のんじやぞ

第百一 旅ヲシタ者ノ自慢ノ語

外国へ旅をして帰た者が所々より参て居たる人に手柄を語て「サア此口でデス
しまの小以てハ拙者誰も及バぬ非常の跳躍をしましたそこにハ證人も

沢山ありますといふと聞て居る内の一人が笑ひながら「そふで御座りませう
雖然夫が実ならバ今こゝで同デスとしてサア跳でたらふどう
人のきかぬ事を自慢するより論より證拠やつて見せるがよい

第百二 狼ト馬ノ話

或狼餌をさがしてあちこち遍歴あるき麦畑へ来た所が馬ハ其麦畑に
此手じや狼横目で見て些少計従と心安い野郎に近寄て云ひたりけるは
と狼多を見けて「今我ハ好麦を是計さが喰せ度と思ひかしも口を付ず
に立て居て早く往て喰るせへ我ハ自分で喰よりハ足下の喰のを見る方
が楽みだ何と親切者だらうといへバ「夫ハ夫ハ添い方じや去ながら狼
どのが麦を喰るお口ならバ我の喰のを見さいとて揚後をおかしぬりもせまい

己が用る物を悪く人に云ハ其身の心も厚くれを云に及ばぬ訳じや

第百三 童児ト榛實ノ話

童児が一把花菓と榛実とを入たる壺の内へ手を突込て握れるだけ握
てつかみ出さふとするに壺の口狭くして手を抜ことができずされど握つた実をバ
離すまいと手をバ抜さいと叫喚くと側に居る老寛爺がねんごろにその
子を教さとして「ア好児ぢや半分握ば夫で手が抜ます実も抜ます
沢山の利を一度に望うと思ふな何でも少しづつ幾度にも度がよく

第百四 猫ト假面ノ話

猫俳優の家へ盗に入りあちこち所を探して所が好ね假面を見出
したりそこで猫が手で弄ながら「ア好頭顱だ惜哉に脳がないことい

すべて生物の精神ハ総身にありて総身にあれバ恕も五総身にあれバ恕もかしとぞ
外観の好のハ内部の好くなりとハ致ませぬ

第百五 犠牛ト耕牛ノ話

野飼で自由に遊び居りて居る犠が辛労て田畑を耕す耕牛を見てなぶるせしが耕牛ハ何とも云ずに只一心に働いて居なりしが後鎮守の祭礼あやとて耕牛ハ休息して別段に秣も沢山くれ野辺へ出て遊び居ると只犠の犠が牲にされるのだやとて己が犠を牽て行のを見てナルド汝のねんぶ未ふぞふ云訳かまじや我の辛労勤の方が余程よろしさ我ハ縛をどき斧で切らせられるより平日働で頸をこすられて居る方が宜しうとおもふぜ

第百六 獅子ト野牛ノ話

或野に三疋の野牛有て互ひに中能暮居けるが其辺の山に住む獅子是を餌食にせんと思ひしく三疋一所に居ては何分手に合難しと先ツ牛方へ種々流言を放ちたりそこで牛黨に互ひに罵きあんをこり嫉妬の念盛になりて各自分手々に為と獅子ハこゝぞとすきを得て一ツ／＼に其牛を取り遂に残らず餌食にたのしけるとぞ

味方の分裂ハ敵方の為に好機會じや

第百七 野羊ト牧奴ノ話

一野羊群より離し放牧奴是をまとめんとて呼たれど帰り来らぬそこで小石を取て其野羊に投射ると石が生憎角に当り角さけたり

こゝやあると牧奴聞いて「世の中を旦那へ告てくれるなと叱れバ「すぐ汝ら
ぞりな事じや私ハいかにとも角がこそふ云ます

證據ハ言葉よりも明白じや

第百八 佛像を負た驢馬ノ話

或ろ驢馬の佛像を負て引列てまちをねりあるくと途中の往人が皆拝跪ひて合掌を敬せりるを見るゝて驕ますまーさ我を小るり鼻うごめかして大踏歩にあるき行とまご鞭をあげて「コノ畜生汝がりきむも不じや此像佛が尊いのじや

世の中の愚な奴ハ役目のお蔭で敬れるのを己が尊い故ぞやと思つて威を使せるゝぞるよ一ながりといふほど

第百九 狐ト鶴の話

或日狐鶴をちそふせんとて招きしが狐ハ鄙吝心を生し客の食物を惜りて自己が食よ充む物をと思ひ浅き大皿に羹汁斗り入してさし出したりを時鶴ハ是を見て迷惑ハ思へども細く尖き嘴まてかーづて羹を吸て飛ると狐例より口を出して忽ちこれを啜り尽し鶴ハ僅ハ吸せもせず空く食ず海でも鶴ハ打飢て飛れり其后時狐是をとみて不審の顔色をして「汝ハ此羹がおきらひでおるかハテナゼ食りませねお氣の毒なると「いふと鶴ハ甚笑をーしてこれ舞おの挨拶をし「狐さんどふぞ私方へも当来を詫でもいひたいといつぶいきるく承知して「来で下され明日上りませう何分に馳走をといふ故鶴ハ心よく悦びて急度に

諸やますと云捨て帰りける 扨其二月頃と狐酒菓を造へむして鶴
の許へ入来れバ鶴ハ此様酒殽を出したり其時狐己が大盃
罈口に香よき美菓を入たるなれバいかにせんと途方にくれると鶴ハ仕
済したりと香き酒を己の口へ突入てさも甘さふに吸てみせるに
狐ハ別に為方なけれバ側より舌をさし出てと己の口を嘗て其場のミ
飢たる彼ハついに来てむざ去とて亭主を恨まれも七度殺昨日の答を
捜されたのじやと己が先非を後悔してすごく巣穴へ立帰りけるとなり

化人を計まいハ我も亦謀らるゝ 抑ぞ化に計らるゝことがぬ
なかなかまして化を謀ると云ふまいぞ

第百十 獅子の皮を被つた驢馬の話

或時驢馬騒き真似をして威勢を振らんと思ひ獅子ノ皮を被つて獣
の中を横行し弱に的て驚して終に狐に出会せたり其時ほざいハ耳ぬ
にも狙を塗ませて居んすと仮変をして一声高く吼ると狐ハ少けかりし
が知りとへりて笑すまし 可笑 知居なぜ我ハ此の吼を聞きたふさき狙

未身に不移ぬことをする者ハ大抵やり損してハあふさ出を
来じや

第十一 驢馬の陰ノ話

一壮男夏の極熱き日に「アテ子」といふ都より「メカラ」といふ所まで驢馬を雇て騎行しが軈て日中の頃に成て熱き堪がたくなり
されバ男鞍の上に堪り兼どとぞて休息致さふと下りて末馬を尾出まで
に廣き野原の中するれバ物陰とてハ更になるしその時男氣が付て是ハ

峯ひだところぞの陰へ這り込とする奴も気が付て同じく我も其陰へ這入て節
たゞ少計のいて下されと客を外へ押出せば男中々承知せず以の外怒を
起て「何ぞコノろおハ」アノ子から」メカラまで突切者ぞとりきむ狂る奴も亦
怒を起て「そら蛇者ハろぞを屍ハ去やつさだの我去ろぞの陰をお貸やし
やしませんと彼是言たゝして居る内にろおハ隣ぎに狙をつぶして何事もうま
うまうけ出して仕舞けると

先年余が友達通先生の咄皆に語されし話に或所に足手中抜く
着して年老の親父を奉養して居る者ありけるが其親父が不
つくり死と或夜息子達が寄合て親父の湯灌の会を死分ま
ろとて足手喧嘩を起たり然るに其夜盗賊の隙き付込て
忍入丁度出して有し死分の金を人知ずに大奪去て逃り抜去不正
辺の人達が家内のさわぎを見付て和解に来りし後一同喧嘩も
静まりけれど折角分よふとしたる金ハ盗で見付る見当らずそ
こで喧嘩をする行心の程ハ盗まれて無有りたれど後ハ足手中
が其ハ実に来らず生涯不和で住辞なる夫ども始ふ兄弟よ争
奪さして喧嘩を始るをとやされしを有りけるが本文話に恰似ること
い急おひ出せしまゝ記し添ぬ

第百十二　野牛ト野羊ノ話

野牛掛子に追班られ曲角てたまらずして野羊の栖でる洞穴へ逃込
ト野羊結を立て角で追出さふとするを野牛ハ抑自に敗ざして小致で

五十に

言振「コウ先様知れへる我の發毛ハ眼前汝の發毛ホ取すだ何でもいく
翻るん者ろせへ獅子をきたしさへすれバ虫ろかくさを射てみせるから
不意の至人ハ鱗の災害ホ気づいて是を討るを能てのあるホ
あやうく実ホ浅まかる可笑じやそんなてんとするとその災害が後
ホハ自分の頭上ホもかかつて来ますぞ

第百十三蝦蟆の薬業者ノ話

或日蝦蟆沼の泥の中から這ひ出して石の上ホ立上り禽獣疾病の為め
来たと称て大声揚て告て云様へサア寅来て天下の名医を弘らふじろ私
代来安の薬売人拙者ハ即へイスクレーべらス華佗の名ホて扨死土まで
所謂ミヨーラエノ弥医ろ天帝の医官でござるサアお出なさいく拙者数ホ医で

藪の中から這出てきて「イヤア先生ハ先自分の跛蹣あるきをお直し成れ
なとも出来ず又其顔の斑点や皺の療治も出来ないせホ何と他の療
治をなさるのでござるか
専業ホよつて其人の説ハ志まします医者の不養生でハ
とんといけません先自分のからお直しなされ

第百十四馬ト猪ヲ負タ彊ル話

或人馬よろぞと牽て旅をろせしが何でもなにがなつて云ふと猪の
と後ろぞろぞへ負せて行たりそこで其三日たつところぞハ忍耐ができるく
ぬる強ろホ向て頼む様へ汝も分けて与へるせへそふすりや我も息が休
ろこもら汝がいやと言や我其荷ホ圧されて仕舞のさ夫じやァ倒に汝

のためもなくれへと云ても言ハ一言も出させず呵りてちつとも構ひ付
ぬ故なれバ金銀をもひよろつくあるだけ黙(だまつ)て出行て悲み泣く者さへ通り
ならバ其所に倒死て仕舞たりそれを見ると主人が抱つき次第来てなぞの船
を解(とく)て置るの方へ蹴落おまけになぞの死骸まで負(せおは)せると云ふがため息ついて
「そ者が悪れバ自分が負べき任を嫁た物さへ今ハ重荷におまけの死骸
までおくのぞ

余り他に物ごとを押付ると天秤が来て頭より余計の重荷を負込ものぞや

第百十五　男二人ノ妻ヲ持話

昔男我人も妻を持ッてゐたされ世に方今西洋にては一夫一婦の方にして一家の中に婦を娶ることをゆるさず
齢長るまで妻を娶ずして居ける或男有しが其齢ハ老なりと云ふもあら

ぞまだ若しと云ふもあらぬ程して鬢(びん)髭(ひげ)の稍(や)白とまじる頃にてぞ有ける
然るに世間並と二人の女に別深てより何れも寵愛(ちようあい)て二人とも心に捨がたき
思ひありけるが一人ハいと年若く盛んなる者なりければ夫の若やかに見
ゑて己に似つかはしからんと好ミ又一人の女ハ年老け色謝たるもの
なれバ夫の春秋(としつき)まさりて我より老しく見へなんと喜び之に依て男若き
女の方へ行けバ白きびんひげをぬき去れ老たる女の方へ行けバ黒きびん
ひげをぬき去れあちらにてぬかれこちらにてぬかれ果に或頭出て
るにびんひげの毛一すじもあらざるまでになりけるとぞ

自己の主意を通さんとして猥(みだ)りに人の説につく物ハこれハ條
理を失ひ世の笑ひものになるぞ

第一百十六 塩を背負し驢馬ノ話

山手に住或荒物屋が驢馬で塩を市場より仕入たりと安個あるかれを自分で引て塩の買入に出かけたり 相渡りてかれは随分大荷を買込て家路をさして帰る途中で小川の辺へかかりたる時かれが驢馬が石に足をすべらせ河の中へおちり込と荷は塩じや故水に溶て仕舞つたりそこでかれは心で身が軽なつて大層軽いと容易く岸へかけ上り歓び勇むで主人の帰りける後に主人は損をして悪いと其翌日又かれを引て浜へ出かけ今度は前日より多く塩を買込てかれが背に負せて家の来て前度川の辺へ来かかるとかれは昨日荷を卸したのにこりたれけとわざと川の中へころまり込ば塩はまたとけて仕舞たりそこでかれは荷は軽なりて身軽になつて大層歓びと歓び

勇むで主人の帰りける主人は二度の損をした後はこいつは悪い癖を覚えたわいやるほどとて又次の日にかれを引て浜へ出かけ今度は塩をば買はずして海綿を買込例の通りの路筋を追て来て前度川へさしかかるとかれはこてじやと又川の中へざんぶりところげ込身を投ひたしてみれば今度は荷が海綿じや故水が含込で大そふ重く成中々忍耐ができかねたれど是が自分の悪きたくみ故ちめきるかじき荷を背負で漸く我家へたどりつきける

同じ頑愚が何を企てるとのにいつもいろいろね余り放々自一方をするものじやと云ておりますす

第百十七 谷川に立たる鹿ノ話

夏の日に鹿水を飲んと谷川へ来り淀き所へおり立て己が容貌の水に写る

きるを見て「何と我角ハ立つりなき立派なる物ぢやが夫に引かへ世上の痩
て弱々しく見ゆるてハ誠にあんがるハ无が造物者の無分別なり形状を批
判しるが悠と水を飲で居ると猟人が犬を連て跡を嗅付て来りけれ
バ鹿ハ狙を詮して最初軽々になりぬと言ぞ足に任せて逃出しさ
れが或茂林の中をくぐる時立派だと自慢して居し角に小枝が引か
らまりきりくと気をもむ内猟人が追付て来て忽ち命をおとし
たりけると

何でも飾りよりハ実用なるぞ

第百十八 天文者ノ話

或天文学の先生星を見るが能細工あり能晴て星の変くたる
骨惜の通り星に見とれて仰向て歩く内に大溝の中へ落入たりそこで
先生溝の中から首を出して叫喚しきりに助を呼たれバ隣家が聞付て
来て拘引上て見ると爾が常出入の先生なれや扨能切に介抱してさて訳を
問たらへで「イヤ先生汝天文を能覚なれバよけれどもちと足下にある
世の中の物にも気をお附なされ

いかに学者なりとて世の中の物情に構ねでハ世渡りハ六ヶ敷イ
先生方チト心を用ヒなれ

第百十九 児輩ト蛙ノ話

児輩一群に成て池の辺りに遊び居たりしが蛙の数多居るのを見て手まく礫
を拾ひ来て蛙どもに投付ると丈が為に蛙多く死たり時に勇気ある蛙が水の
面に首を出して「コウお坊さん無遊びハ成ろ汝の楽しきが私共の死の成ます

自分の為に詰ことぞや是も他の為に害に成ては勘弁をせにやア ならぬぞ

第百二十 羊飼ト海ノ話

或羊飼海辺の所へ飼て居る羊を移し毎日看護をするが海の穏なる
のをながめて我も上に舩を渡せたらば嘸よかろふと思ひ付をとそ抱て居る羊を
残らず賣拂ひ來て椰子をたつぷり買込で舩に積入て南方をさして出
帆しけり然るに出帆して後程なく颶が吹起つて舩は破れ荷は失なり元の身
手ぶらと逃れて帰り來ると或友達が來て眼前海の穏なるのを見て不審
そうにいふ難取しと「汝あんなる静和る面をして居るものに油断をするな
さんなありや汝の事で椰子を目がけて居るのだぜ
静和る顔をして居る者は却て油断がならぬ者じや

第百二十一 大魚と小魚ノ話

或漁師魚の群ている海へ網を卸して引上ると小魚は網の目からぬけて
再び海へ逃込たれど大魚は網に罹て船の中へ上られたり人も左ごとく小
身なる間は目立ぬ者は時に立てはあんなる者ぞやまして立身るど云ふを出すまいぞ

第百二十二 牝野羊ト狼ノ話

牝野羊牧場よりさまよひ出たるが狼に追掛られ逃路の無成たれば今から
へ向て狼に打向ひ「妾は運徹く君子君の餌となる都化の御もなべぶず候て
潔よく一命を奉らんとぞ思ふなりついては願ひ申度一事あり妾幼時より好
みて踊りを踊りたるにいまぞ世の名ひ出に一曲を奏する事を許されるならばさこそ
嬉しからんと云ければ狼打興じて「其は面白しいざ踊りなされ我も笛

の名人なり笛を吹て景清を舞や中さんと云て面白がりし出しあれど
犬ども遥に安針て一ツ何等の娘りしやと只一途に跡て来りが猿ハあきて
猿損野羊の方るハ目も不ずして只にまろせてにげ去ける
我なすべき事をも外にして拒異などするにまり込人ハたとへ所職
を失ふとも覚悟をして悔ることなかれ

第百二十三 河ト海ノ話

或時河伯ト海若との互ふ争論して来ると河ても安合て海の方へ押来り
口々に大なる声をして我等平日甘い真水を汝の所へ仕送るに汝ハ是を塩
にして呑に出来ぬ物にするなと云と海ハつめたく川の怒たる様を見てあもる
げに打笑ひて夫ハ汝等みなの水が塩にさせぬのを心ときるるさせるたゞ

遠慮なく他へ送るは何も世をすべらし静ご笛を止めへしと云掛ひける
他人の世話を欲て世を送る者ハ何事も人に任せずして居げ
くるしきおもひをとらんねんせよ

第百二十四回 野猪ト狐ノ話

野猪が松の幹へ牙を摩擦て磨で居る時狐傍を通りかゝりしが見とがらけ
て今ハ足下ハ何を為るさる備も一匹犬も見へぬとふと危殆の無のにと云
ハ猪ふりかへりて左様さだが騒動が始てからハ私ハ牙を磨より他に用が嫁くあり ますまい
狐さし換ト云喇叭以ら噂から牙を磨初めてハおそまきじや

第百二十五 象馬ト驢馬の話

或農夫立派る飾りを付て大に狭しと跡来り荷を脊負てと

なくおろながら後へどうりつけ「ヤイ敵へよれ〱まく〱さそると踏殺さぞ
とりきわめろぞ何とも云ずして論に敵へよけて馬をやり通して仕舞なり
扨其後某地に軍が有て世宗馬が年ぎ〳〵を変てもや軍の役に立ぬ
と主人にも暇を出されて田舎家へ送られて居たり然るに一日以前の事ぞが
或所へ荷を付て逃てゆく〱に成て帰り来る途中でやせこけたる具足か
もひ荷車を牽て居るのを見てハテ見て操るとつく〴〵考てみるに昔が若年
已をのがつさ禁る殺どふかして乙れんぞと思ひしが盛る時に余り威張た結
で今ハ助けて置る友ても甚こんなやつさが根に及ばぬ程と只横目でみて行
すぎたりしと
老共なりとも下賤の者を侮ることなかれ有為転変の世の中ぞよひふ

ハ他の身の上なりとも昨日ハ我身にかかる者と知べし

第百二十六 豹ト狐ノ話

或日豹と狐と出合て豹が「よい獣じやとせんぎする時豹が毛の斑紋を自まん
するを狐が笑ひ「其毛の奇麗なのより心のきれいな方が勝じや
よそぎふに人の面貌より只心がよいのがよいぞや

第二十七 犬ト生皮ノ話

或飢ている犬ども製革人が暴すとて河の底へ沈て置た生皮を見付て
肉を食たきものだと思ひ入れどもそこまで行てもできぬ故其水をやあそこ迄
水を呑ほさんと種犬ども云合せ口を揃へて飲初しときなかあハさつ
ぷり腹りもせぬの小犬どもハ其腹が裂て忽ち死けるとぞ

むりなることに目的を射て遂んとする者ハ中途で仕損じて身を亡すものじや

第百二十八 蟻ト鴿ノ話

一蟻泉水に来て水を飲むとする時足をすべらせのめり込て殆ど溺れ死なんとせしが岸の樹の上に止て居たる鴿是を見て慈悲心を発し木の葉一枚啄んで下る蟻の傍で浮る水の上へ落してやると蟻ハそれへはい上り遂に岸まで流れ来て危く命助りたりかゝる所へ殺生人がいつの間にか出きて竊と地ひろてんをもつて今の鴿を捕んとして居たれバ蟻ハあわてねとふはひ殺生人のかゝとへひどく噛付とその人ハおどろいて躍り上る そのひきでひろてんがそれたり落る それで鴿めが飛去たり

我他の善をなせバ他も我に善をなすぞ

第百二十九 狐ト鴉の話

一鴉窓へ出して有し一片の乾酪をさらつて高木の上へ飛上りこゝで喰つくりたちそふにするふと欲で啄へて居ると狐がちらりと是を見て心の内に悪計を生じ先づ手段を工夫して「コレヤおからすさん汝の容貌ハ何と美いじやござりませぬか夫にマアお眼の光り様とハお羽色との好とお声の形が好勢る小似てお生なさるあんハ汝のお仇ハどんな獣でも叶やあませぬ去りし汝の揉るふ足のないこ貴ハ大損変のこちひものだと誉ましたがそふうかの去りまませぬト云と鴉おぢてふ変てやきと成音が一ッ妙なを出して野狐さ驚かして夫によふとうつかりと口を開けバ啄へ居たりし乾酪ハ地へおちさりをふするると狐が頭よつて引くらへ「先きろゝ果鴉を揺くあわてやつ

たが精神(こころ)のうへに付ては何ともいやァしねへからさつけ ト人の肉で売らへるが
ら跡をらふましいわけさりける

肉人に尻迄が来て何で人が屠つてひと云ふ物か文を飲て忘れは
跡で諂諛(つつひ)料を立るのさと覚悟をして居るがいゝ

第百三十 猟師ト飼犬ノ話

一猟師小犬を飼てありしが其犬いつも主人の仕事に出ると寝始て飯を喰(やい)ねる
と起ける故一日主人が飯を喰ながら「まだ此畜生は横着ものめと云ながら魚(とと)
の骨を投てやり「此ァ鉄砧(かなしき)の音さへ聞ァ寝始て喰ふ音を聞ァ起やァがる

人も自分の為にならぬと耳を塞(たて)て聞ますが其友達の噂
るとよく耳をつぶして居ます物と困たものでござりませぬか

第百三十一 田舎人ト犬ノ話

一倹丈冬の間雪に降り籠られて食物を外に求ることができぬ故貯(くは)
畜(たつ)た羊を屠して食つくし夫でもまだ雪(ころ)が降つゞいてとんと晴るけしきがない
故余義(よぎろく)耕牛(くふうし)を屠て喰(くは)うと飼犬どもが是を聞て相談をする様「サア斯
じやァならぬ旦那は骨を折てはたらく牛にさへみれんがないぞへどふ
して我等を助るものか

犬が隣家へ移つたから自分の家も燃るのだと用心をするがいゝ

第百三十二 猟人(かりうど)ト伐木人(きこり)ノ話

一猟夫(かりうど)野山へ獅子狩と称(せう)して出かけ居ると伐木人に行逢(かへ)たる時
「此獅子のあるいた痕跡(あと)を見やァしねへか獅子の洞を知つて居るかと尋(たづぬ)

然ニ宮へ行けると伐木人倭をとめて「アイ御公僕とお侍ニ岩行放れ
ハ獅子をおそれせやませうト云と猎人ハ数急ゞ怒り未蔡ニなつて
崖の根も合ずふる人ならバ「早く失ハニア有難い表かし私ハ獅子の足
あとをタりニ出さのでまニ獅子を猎のでハござらぬ

危難ゞ迫らぬ時ハ様病者ゞ中ゝ勇者でござる所でも心の剛
様ゞ分るのハ危難ニ臨むときニ限ります

第百三十三 老爺ト息子ト驢馬ノ話

一老爺ろばをときこ町の市ニ売んとて息子と共ニ牽行ニ在の稚僕
あるくと話しつ笑ひつふざけながら市より帰り来ル一隊の處女ニ行逢たり
其時一人の娘ゞ大ゐ声ニて「ヲヤマア あんな愚なる人をごらんよ乗ろそ
を牽ながら二人ながら歩行て来ますハと云て咲ゐると老爺早く安
よりてここで息子をろばへ乗てさも嬉しそふニ側へ附添て行と稲妻
所ゞひりゝ話しをながら来る一群の老人と行逢たり其時一人の老人ゞ
他の者へ向て「夫りやこそ私ゞ今言通り證拠ハあれじや方今所ぐ
老人ゞ敬せしまするものゝ此筈アあれを見らんおろ年のよさ老爺
ゞあるいて来るのニ若い者ゞろばニ乗て咲ますハ何と不精な奴でハ
ござらぬかト云ながらろばニ乗て来る少年をあぶニ付「コラ降ろ孝
者め老爺ニ足を休させぬかト云て通りゐると老爺あわてて
じやと安ゐて息子をろばより下し自分ゞ乗りてとつと歩り行と子
供を連た婦ゞべちやくちやくしやべりながら来ると行逢たりき時後婦達

にさ様へ「コレや老爺ふ難ぎれへこのあいだによ年も若い子が徒歩にあるいて
行のに何と自分斗りろばへ乗て行のへといへバ元来人品のおやぢ
殺生すまさると思つて息子を驢馬にのせて町まで来りな
時ま一人の町人ト行違たりその町人声をかけて「コイ老爺」ミ
ろばにおまへの人「ハリきやうでござり升「余りひどいなさけよふをするさる
ぐ人が云ふ事を志ひへぜひぜひおまへたちハそんなむごい事よふをする
さる丈夫な若い者二人でろばをかついで行なされへといふと老爺「そんなら
あなたが仰せある通りにいたしませうト云て息子と同時に驢より下て
ろばの足をつかね棒を通して親子肩を入かついで町の人に
の橋の中ほどまで来るが彼方の見物人が多勢詰集て笑や

しぞて笑ひければろばハ騒ぎに縄をつぶして苦しまぎれにあばさく
まるところ縄がちぎれて棒より落て河の中へところげ込たりそこでおや
おやハ仕方がなければ皆打捨の人びとよふけだとにこざるさるるが
息子を從へ叱りつゞすごく家路へ帰りける
何でも人の氣に入るをと思つてあちらへつきこちらへつきつき
婚姪説のきまらぬ者ハ終にハ此おやぢの様に雅の氣とも
入ぞして本までも失ふものぞ

伊曾保物語 巻三終

明治十四年秋九月 更写ス

義子

大二
ころもえ

テの

Goro Udagawa's
book.